

は嫌らむが爲めである。是等種々の経験を積む間に、児童は漸次に一つの事物が他の事物と如何のように關係して居るかを知り、而して其等の事物が互に成るべく高き、大いなる、又永續する利益に貢献するように手段を構へるようになる。即ち彼等は段々多少事務家に成り、報酬を求めて仕事をなし、賣らむが爲めに物を造り、賣買上の呼吸を思考し、生産及び商業の法則を研究するようになり、従つて其の知見、注意、克己、確信が次第に發達して来る。

上に述べたところは意志と支配とに關する概畧の説明に過ぎぬ。志ある人は之れを手引として更に十分に其の児童觀察をするが可い。先づ意志の起原及び發達に關して上に説いた各事項の眞なるか否かを確かめよ。また、幼い児童が如何ほど衝動のまゝに事を爲すものであるか、如何なる勢力が、毎日彼等の支配力の發達を助くるか。諸種の支配と一般の感情との間には如何なる聯絡があるか。若し児童の意志が弱いならば、其の原因は何ぞ。何故に或る児童が、身體上及び知力上の支配がよく出来ても、綿密なる注意が缺けて居るか。何故に或る児童は注意が綿密でも知力上、身體上の支配が出来ぬか。是等の缺點は如何ほどまで其の

原因を身體の不健康或るひは家庭の羨しほに歸し得るものであるか。児童をして身體上、知力上の支配力を得しむることに關し、賞與を以て勵まし懲罰によつて威すといふような外からの壓迫が、如何ほど與つて力があるか、又自分で其の理想を實現しようといふ児童自身の欲望能力が如何ほど與つて力があるか。如何なる身體上の障礙が之れを妨げるか。児童が如何ほどまで自然に、或るひは如何ほどまで偶然に支配が出来るようになるものであるか。或る児童の支配力を具ふるこゝとが、何故に遙かに他の児童に後れるか。また後れる児童は、凡べて精神が鈍劣て教化の仕様のない者であるか、はた其の後れるのは取扱の仕方、教化の方法が悪い爲め、若し深切に同情があつて、勞を辭せぬ父兄が合理の方法によつて教へ導けば、つひには支配力を具へさせ得べきものであるか。是等は凡べて吾等の注意して研究すべき重要な問題である。

前節の最後に擧げた問題は意志と意志との相互の關係を指示したもので、意志は善惡いづれの方面に於いても斷えず他を化し又他に化せらるゝものである。朱に交はれば赤くなるとは、よく此の關係を言ひ表はしたものの、児童が其の遊び仲

間から知らずくの間の大いなる影響を受けると、又其の影響の長く引き續くと、何人も知つて居ることである。教育の過程は、一つの意志が多少秩序ある方法によつて他の意志に影響し、之れを助長して、理想的發達をなさしむるとであるといふが、これは全體より見れば、よく教育の過程を言ひ表はしたというて可い。意志の教育種々の意味から見た支配力の發達、是れ實にあらゆる教育の眞の目的である。兒童の意志は全く傳染的に他から影響さるゝともあり、又分別ある勸告扶助によつて感化さるゝともある。しかしながら意志の教育は到底少し許りの突飛急激なる努力によつて成し遂げ得べきものではない、唯だ造化が萬物を化育するような徐々たる規則正しき過程を経て始めてよく遂げ得べきものである。

兒童をして支配力を具へしむるには急がず休まぬ注意深き教育を要するとは、あらゆる他の心的活動に於けると少も違ふ所がない。吾等の施す各の骨折は悉く兒童に影響して益、彼れを強くする。元より一時に得る所は至微至少で目に留まらぬほどであらうけれども、度重なるに従つて其の効果が著るく現はれて來る。即ち兒童を適當に教へ導けば、日を経るに従つて其の支配力が益、強くなる、従つて

愈、伶俐に、愈、迅速に、愈、精確に事物を選択し、愈、容易に愈、巧妙に愈、効果の擧がるように業務を行ひ、又愈、思慮深く愈、沈着に愈、自己を恃み重んずるようになる。しかのみならず、支配力の方面に於ける斯様な修養は、おのづから兒童の情性に影響して其の性格を固め不慮の出來事又は困難なる出來事に遭つても落ち付いて適當なる處分を爲し得るようにならしめる。

意志の最も高尚なる作用は、道德的支配、詳しくいへば正義の理想に従つて自己を支配するところである。兒童が道德的支配を爲し得るようになれば、純粹なる利益の念は正しい行爲を爲さむとする一層高尚なる欲望に屈服して、動機としては現はれぬようになる。此の道德的支配力を得るとも、兒童によつて大層遲速がある。或る兒童は頗る夙くから正と邪とを區別するが、或る兒童は長く利益の觀念と正邪の觀念とを混同する。彼等は自分又は其の朋友に快樂を興ふるものをば何でも正しいと考へ、苦痛を興ふるものをば何でも不正だと考へる傾きがある。彼等は皆容易に利益の念に動かさるゝ、而して其の利益の自己に直接なる場合には殊に甚だしい。けれども、正義の念に動かさるゝことは甚だ遅い。子供は自然に爲

すこと及び在ることよりは獲得すること及び所有することを多く考へる。兒童をして道徳的支配を爲し得るようにならしむる一般の方法は、前に細心の支配を説いた處に述べたのと同様である。尙ほそれに關する精密なる事柄は、後の「風習と道徳」と題した章に於いて述べようと思ふ。

第十六章 知と其の作用

其の一、知覺、記憶及び想像

意識(*consciousness*)、攝覺(*apperception*)及び注意(*attention*)に就いては前章に於いて已に定義を與へて説明した。此の三者は多少あらゆる心的活動に入るものであるが、其の本來の所屬からいへば知の一般作用である。知的活動で此の三者の他に残つて居るものは知覺、記憶、想像、概念、判定及び推理である。これからは等諸活動の特殊の作用に就いて簡単に説明しよう。

知覺(*perception*)は、感官に現じた箇物の知識を得る働きである。知覺はあらゆる攝覺に於ける最初の段階即ち攝覺の基礎ともいふべきもので、それは單に吾等の前に現はれた物の何たるかを語り、其の形狀、色彩、組織、材料、重量、表面、部分、運動等を一つの心畫に纏めて示すものである。而して其の心畫の廣い關係及び十分なる意義は攝覺、比較、推理等の心作用の發見する所である。茲に、我が机の上に一挺の小刀が載せて在るとせよ。余は先づ知覺作用によつて其の柄、其の形、及び其の物を製した材料を發見し、又、其の一端には竹の葉に似て煌々する長い一枚の刃物が

附いて居ることを發見するであらう。さすれば、余は其の物の名を知らずとも、此の一挺の小刀の畫は明らかに余が心の中に成り立つ、而して此の物の或る部分の知識、或るひは其の部分と綜合した個物の知識を稱して知覺といふのである。さて、此の心畫の構成さるゝ際に我が過去の經驗が多少其の中に入り來たつて現に吾等の知得した意味を其の物に附與することは何人も容易に氣のつくところであるが、かく過去の經驗が入るだけそれだけ、其處に攝覺の指示が加はつて居るのである。即ち攝覺とは、詳しくいへば過去の經驗に少しも關係なしに其の物に存するもの以上、の意義が知覺に加はつたもの言ひ換へれば純粹に感官の與ふるもの以外の意義が知覺に加はつたものである。さて其の小刀を更に再び注視すれば、それは我れの所有物である、貴重な刃物である、近頃製造したものである、或る種類の仕事だけに使用し得るものであるといふようなことが浮かんで來る。これが即ち攝覺作用の供する所である。余は曾て或る停車場で、一人の婦人が列車から降りるや否や出迎へた人々を見て泣きくづをれたのを見たことがある。人々は皆深黒の衣服を着けて居たが、之れを見て悉く泣いた。これだけは知覺が余に

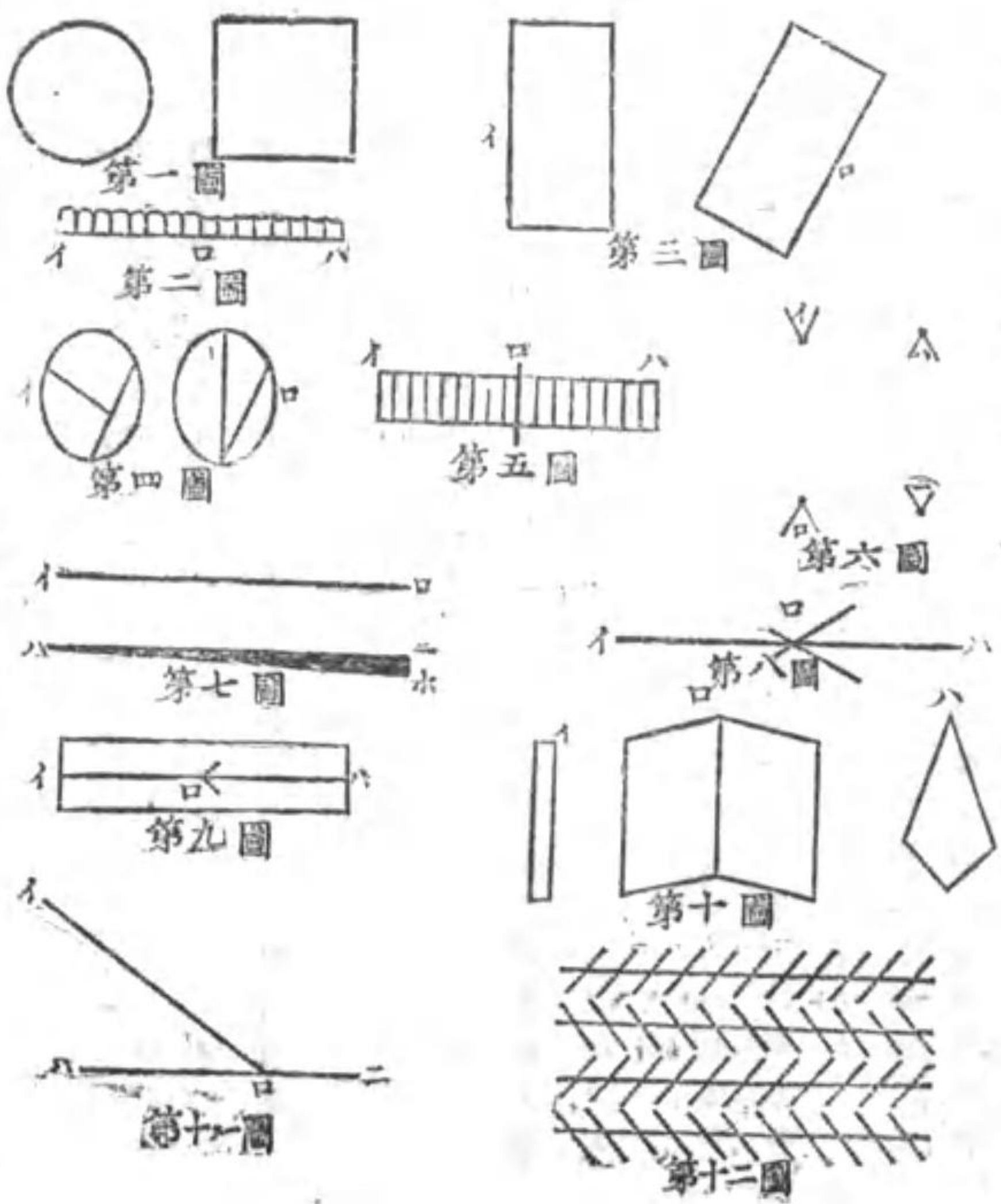
與へた知識であるが、攝覺は更に余に示すに、此の婦人の近親が死亡したこと、それ故其の婦人が斷腸の悲しみに沈んで居ること、其の家には主の無い空房の在ることなどを以てした。又、或る家で壁に懸かつた額の小さい畫を見たことがある。余が其の畫に關して知覺から得た所は、畫の中なる一つの家の葉の落ちた樹木、破れた籬、家の外の上部分が灰色なること、屋根の上及び地上が白い顔料顔料で染められてあると等に過ぎなかつた。されど、余は攝覺の示す所によつてそれが寂しい荒れ果てた冬の田舎の夜の景色であることを知つた。簡單にいへば知覺は如何なる物が吾等の前に現はれてあるかを告げ、攝覺は其の物が何を意味するかを告げる。教育ある人も無教育の人も、其の知覺する所は一様であるが、教育あり、經驗に富んだ人は、其の出會ふあらゆる事物に於いて、他の無教育無經驗の人よりは遙かに多くの意義を見出だすアソシエーション（即ち攝覺する）のである。

聯想及び離想 (disso-ciation) の法則は、知覺にも攝覺にも適用すると出来る。知覺は時間及び空間の中に物體の位置を定め、又其の物が他の物體に對する關係及び知覺する自己に對する關係を定むるものである。一の物體と他の物體とを區

別し、各物體を構成する種々の要素、各物體の特性、及び其の類似を見わける過程は、兒童の生活に於いて甚だ重大なるものであるが、それが知的生活上價值あるものたるには、第一に精確なることを要し、第二に迅速なること及び多面的なることを要する。動作が遲鈍に眼界が狹隘なる兒童は自然に廣く事物を知り得ぬようになる。蓋し、知覺は感官から來るもので、直接に感官より得るあらゆる知識は、心的方面からいへば、悉く知覺を組み立てる所以の資料である。されば先きに諸感官の作用及び其の養成法に關して説いた所をば、常によく實行して知覺教育に資せねばならぬ。

次ぎなる十二の圖は攝覺が如何ほど影響を大いなる知覺に及ぼすかを知らしめむが爲めに掲げたるもの、此の圖を以て子供を試験すればそれが如何程價值のある又面白いものであるかがわかるであらう。子供等が一たび此の圖に欺かれたことを悟れば其の後は非常に用心深くなり、従つてかかる種類のものに容易に欺かれぬようになる。斯様な試験をなす際には何のよ様な氣質の者が最も多く間違ふかに注意することが大切である。今試みに大いさのいろ／＼に違つた木

製の球或るひは立方體を取り揃へ、其の中に二三箇づつ同じ大いさの者があるよ
うにし、之れを子供に示して、其の大小を區別する能力を検せよ。又小さい球或る



兒童學 第十六章 知と其の作用と 其の一、知覺記憶及び想像 1101

第一圖、圓の直徑は正方形の片より長いか短いか
 第二圖、イロとロハと、いづれが長いか
 第三圖、イの長方形とロの長方形と、いづれが長いか
 第四圖、いづれの地平直徑が大なるか
 第五圖、イロとロハとは、いづれが長いか
 第六圖、イロの距離とハニの距離と、いづれが長いか
 第七圖、ハニ線とハホ線との中、いづれかイロ線に並行なるか
 第八圖、及び九圖、イロとロハといづれが長いか
 第十圖、イとハといづれが長いか
 ロの書物は彼方に向かつて開いて居るか或るひは此方に向いて開いて居るか
 第十一圖、イロとロハといづれが長いか
 第十二圖、是等の線がどちらの端に向かつて狭まツて居るか
 是等の圖を黒板に書き、或るひは掛圖にし、教場にて兒童に見せて研究したならば少なからぬ効果を收めることが出来よう。

ひは立方躰には其の内部に彈丸を詰めて、それより稍大なるものと重量を均しくし、さて之れを小供に與へて大いさの指示する所が、子供等が重量を考定する上に如何なる影響を生ずるかをしらべ見よ。此の試験の結果は、大人たる吾等が自分でやツて見ても略わかり得べきことである。

記憶(memory)とは過去の經驗の心像を想ひ起こして再現する働きを云ふ。但し記憶といはるゝには過去の經驗が其のまゝとは行かずとも殆んど其のまゝに想ひ起こされねばならず、又多少定まつた時處に起こつた自己の經驗としてそれを認めねばならぬ。記憶の價値も亦知覺と同じく其の確かさ速さ及び廣さによつて定まる、詳しくいへば想ひ起こされた者が精確であるか否か、速かに想ひ起こさるゝか否か、及び廣く澤山の事が想ひ起こさるゝか否かが、記憶の價値を定めるのである。記憶作用が無ければ知識を得る上に少しの進歩もあることが出来ぬ。感覺、知覺等の表現的活動か如何に價値のあるものであつても、若し記憶の働きが缺けて居れば、到底それを養成し發達せしむることが出来ぬ。表現作用と記憶作用とは互に助け合ひ、互に影響するものである。若し記憶が直ぐ其の後ろに従ふ

ことなくば、知覺作用の進歩は殆んど全く出来ぬことになるであらう。

各の經驗が常に次ぎの經驗を理解する助けになるのを見れば記憶の居るべき地位は容易にわかる。此の次ぎの經驗の理解を助けるといふ特殊の作用は、非常に重要なもので、或る人が記憶の役目はそれだけで澤山で、それ以外の目的に役立つ必要があるまいと云うて居る位である。若し現在の經驗の中に過去の經驗に存した要素を一つでも二つでも含んで居れば、それが指示の法則(Law of association)に従つて忽ち過去の經驗を想ひ起こさしめ、而して想ひ起こされた過去の經驗はすぐに駆け出てて苦もなく新經驗を解釋する。吾等が若し注意して、遊び居る子供を見守るならば此の法則が如何ほど子供を支配して居るかを見る事が出来るであらう。彼等が家に在つて勝負事をして遊ぶ所を見よ、其の多くが屢々上の兄弟よりは遙かに早くいろ／＼の細かな事を合點するてはないか。又子供が舊經驗と新經驗との間に大人ですら容易に氣のつかぬような僅かな類似を見出だして新經驗を理解するとも屢々ある。兒童が事物を記憶しようとして苦勞することはめつたに無い。彼等は指示の法則により事物が意識内に入り込むに隨

ひ之れを捉らへて記憶する。彼等はやゝ年たけて特に仕事を課せらるゝまでは、特に過去の事を追想するとせぬ。記憶の此の大作用は其の效のかくも顯著洪大なるもの、それが兒童の日々の經驗に大便宜を與ふることは改めて絮説する必要が無い。此の大作用あればこそ美術が存在し得るのである。

されど、記憶の効用は上に述べた所に止まらぬ。記憶は、又過去の經驗を保存し、供給し、吾等をしてそれを考究して其の中に含める原理、法則を發見し、其の異同及び性質、價值等を見出ださしむるといふ大いなる目的に役立つのである。二物の異同を見定めるのは或る子供には非常に困難なるとであるが、二物の中の一方が記憶中のもの即ち現に存在せぬものであつた場合には其の困難が一層甚だしい。兒童の記憶に存して居る事柄の模糊たること及び其の全く消え去る傾向のあるとは、吾等の常に見る所て、吾等は斷えず其の爲めに困却して居る。記憶が無ければ歸納も演繹も全く出来ようがない。兒童が歸納し演繹し得むが爲めには先づ現在の經驗と共通の要素を有する過去の經驗を容易に想ひ出ださねばならぬ、而してそれを想ひ出だすことの容易なるだけそれだけ精確に又迅速に法則及び原

理を發見し得るのである。而して、かような發見は又兒童の心作用に反應し、驚くべき速さを以て兒童の把住力回想力を發達せしむる。科學及び哲學は此くの如くにして成り立ち、又發達するのである。

記憶は、又人を謹慎ならしめ用心深くならしむるといふ大目的に役立つ。兒童の不幸の大半は、其の一たび經驗したこと、或るひは曾て教へられたことを忘れる所から來る。記憶あればこそ注意作用が發達し、又筋及び諸心作用の支配も出來るなれ。例へば昨日跌けて怪我をしたことの記憶があるから今日は梯子段から落ちぬように注意する。昨夜感冒を引いて咽喉を痛めたことの記憶があるから今朝からは寒風に身を曝らさぬように用心する。蜂に刺されて痛かつたことの記憶があるから蜂を見る毎に之れを避ける。母親に小言を言はれた覚えがあるから玩具を失ふまいと心を用ゐる。凡べて此の通りである。尤も其の發達は兒童により遲速があつて、皆迅速に右に述べたようになり得るとは限らず、又凡べての子供が悉くさうなり得るともいはれぬけれども、大多數の兒童が早晚かような境に達することは疑ひなく、而してそれが箇人に社會に莫大の利益を與ふること

は明らかである。

詩人はしきりに想像の快樂を稱へるが記憶の快樂は決して想像のに劣るものではない。吾等の生活の初めに溯つて頑是なかつた當時を想ひ起こせば、嬉しさ懐かしさの心ゆく事々數へても數へ盡くされぬ。お母さんの優しい守歌、あわゝ、ちよちよ、魚の目の稽古、桃太郎、かちよ、山のお伽話、軒に歌ふ雀、鞠に狂ふ子猫、シャポンの風船、玉小造化翁の箱庭細工、正月の凧、追羽子、春秋の野山遊び、雪だるまの製造に雪合戦、袴著の祝ひ、學校への初上りなど、いづれも俗腸を洗ひ去つて心地を清しくする者であるが是等は吾等の胸に蓄ふる幼時の美はしい記憶のホンの千一萬一に過ぎぬ。記憶の快樂はただ是等の本來愉快なる事物に存するのみではない、悲哀、苦痛、煩悶の類ひでも過ぎ去つて再び記憶から現はれ出づる時には、いつしか其の周圍から燦爛たる後光を放つて人を引きつけるようになる。

兒童が記號殊に言語によつて思想を表はさうと努むるようになれば、記憶は又更に他の大いなる役目に役立つて來る。本來記憶は段々發達して事實、出來事、年月、姓名、場所、人物、形狀、色彩、運動、原理、法則等を心の裡に立派に整へ置いて秩序正

しく想ひ起こし得るようになり、又必要に應じて何時でも適切に其の思想を表はすべき言語を思ひ出だし得るようにならねばならぬ。かように言語、思想が必要に應じて自然に浮かび出る子供はまことに幸福であるが、一般に就いていへば、其の様になるには特別の努力が必要である、而して記憶が其の境に達すれば、こゝに回想と稱せらるゝ。

回想 (recollection) とは、意志の支配、指揮を受けたる、記憶をいふ。回想の原語即ち英語のリコレクションは再び集めるといふ意味の語である。意志は聯想及び指示の法則を利用して過去の経験をば記憶の中から喚び起こして再び組み立てる、其の作用が即ち回想で、其の過去の経験が関係の親しい近いものであれば早く組み立てられ、疎遠なものであれば遅く組み立てられる。但し、斯くいへばとて、普通の記憶(記憶本部)即ち自發的と稱さるゝ記憶が何等の心的努力もなしに過去の経験を再現すると解されてはならぬ。それは單に想起の努力が極めて少ないといふだけで畢竟比較上の沙汰である。已に説明した通り、あらゆる心の状態は要するに一の活動である、記憶とて之れに漏るゝ道理はない。唯だ回想に於いて

ては意志の働きと努力とが意識中の主要なる要素となるのである。兒童が他日如何なる職業に従事するにしても、過去の経験を如意に想ひ起こす能力には實に言ひ盡くすべからざる價值があるといはねばならぬ。

兒童の回想作用に關して研究すべきとは澤山ある。例へば兒童が過去の経験をば自發的に想ひ起こすか、或るひは明らかに骨折つて想ひ起こすか如何程多くの兒童が名稱よりも場所をよく記憶するか、原理よりも事實をよく記憶するか、耳で聞いたものよりも目で視たものをよく記憶するか、興味を感ぜぬものよりも感じたものを記憶するか、利益を與へぬものよりも與ふるものを、遠いものよりも近いものを、理解せぬ事物よりも理解した事物を記憶するか。是等は吾等の注意して觀察すべきことである。其の他、身軀上の壓抑或るひは恐怖は兒童の記憶に如何なる影響を及ぼすか。時日よりも名稱をよく記憶するか、若し然らば其の原因は如何。反覆の結果は如何。散文よりも詩歌をよく記憶するか、或るひは其の反對か、いづれにても其の原因は如何。後年に授くれば殆んど骨折らずに記憶させ得べきことを強ひて早く記憶させようとする爲めに、兒童をして世を果敢なみ生

活を厭はしめるようなことはないか。又早く教ふれば却つて容易に記憶させ得べきことを後年に教へようとして控へて居ることはないか。是等も亦注意して観察すべきことである。

吾等が若し長い間観察を續くれば長き時日を費やして考究すべき十分の材料を得ることが出来るであらう。而して研究の結果恐らく左の結論に達するであらう。

兒童が問題を理解することの明瞭なれば明瞭なるほど、

それが益、兒童の一身の利益と需要とに影響を及ぼし、

原の(即ち初めの)印象が明らかになれば明らかなるほど、

それが益、確實に彼れの他の知識に關係し、

事物を記憶する方法が自然なれば(即ち無理が無ければ)自然なるほど、

それを想ひ起こすに骨が折れなくなる。

又反覆及び筆記は、記憶を助ける方法としては全く價值が無いとはいはれませんが、兎に角劣等の地位に居るべき者とわかるであらう。知識を得る上の正しい習慣

は、知識其の物よりも遙かに望ましいものとわかるであらう。

想像(imagination)は知力作用の第三の大いなる別かちで、心の裡に繪畫を形づくる活動である。其の働きは理想を具體的に現はすに在る。知覚は吾等に物體の想念を與へるもの、而して先づ物體があり、それが吾等の心に映つて出来るのであるが、想像の働く順序は之れと反對である。想像は先づ想念から出立してそれを箇物の形に現はす。それは創造的で新らしい形、新しい箇物を生ずるのが本來の作用である。其等の形は或るひは何等の定まつた目的もなく單に機械的に構成さるゝとがあり、或るひは人間の精神に存する最高の理想に據つて形づくらるゝとがある。又想像は其の起原からいへば、或るひは殆んど全く情緒的なるとがあり、或るひは全く知力的なることがある。想像は吾等をして路傍に横はれる木片から直ちに馳せて雲慶、湛慶の佛像に赴かしめ、皿の裡なる馬鈴薯から獅子、虎、豹の姿に、物干にかけた白衣から物凄き幽靈に、路地の行潦から怒濤澎湃たる大海原に行かしめる。子供の幼い想像に就いて言つても、繩に於いて蛇を見、石、輪玉に於いて地球を想ひ、雪と炭と鮑殼から雪達摩を作り、砂と粘土と木片とを以て猫、額太の

箱庭に深山幽谷の景色を形づくる。箇人を刺激し提撕して理想を追はしむるも想像である。人間を鼓吹し優美にする藝術の美はしい世界も想像の所産である。想像は實に人生のあらゆる方面に觸れて、人間を進歩せしむる者というてよい。想像が單純で且つ機械的なる時に於いては其の作用は主として考案的・發明的で、其の目的は或る思想を具現し或るひは特殊の目的に役立つ物を造り出だすといふことよりは、寧ろ單に或る物を構造するにある。兒童が數時間を費やして土人形或るひは木片の家を造り、而して出來上がるや否や少しも惜氣なくそれを毀し去ることは屢、吾等の見る所である。彼等の遊戯は斷えず其の想像力を刺激して活潑に働かしめ、而して彼等は其の自由にして止まる所を知らざる想像に驅られて、忽ち構造し忽ち破壊し、或るひは焼き、或るひは殺し、或るひは逃げ、或るひは死し、或るひは再び息を呼^よき返し、一朝にして大富豪となり、一朝にして全財産を失ひ、或る時は仙人となつて月世界に旅し、或る時は神醫となつて藥を施し、或るひは老婆さんになり、或るひは兵士になり、或るひは水夫・消防夫・商賈・藝人・犬・猫・牛・馬・猿・熊・鹿・山羊・巨人・一寸法師・牧童・仙女・天人等になるのは、子供の爲す所に見、又自己の幼時の

經驗に徴して何人もよく知つて居ることである。兒童が是等の想像を爲す時にも、彼れが書を寫し土を捏ねて物像を造る時と同じく、矢張それぞれ技術意匠がある。兒童の此の想像の仕方、即ち彼れが有し、視、聽、き、或るひは觸るゝ物を變化し配合し行く仕方こそ實に彼れが成人した曉に爲す所を豫示するもので、彼れが其の經驗を按排して新らしい形に仕上ぐる術及び仕事を爲す手段を工夫するところが巧みなれば巧みなるほど、益、彼れが實際生活に入る時の準備が出来るのである。

試みに、兒童に一つの物語を讀み聞かせ或るひは語り聞かせて各兒童に其の物語に關する書を作らせ、而して彼等が書に表はした所の如何に異なるかを觀察せよ。然らば、或る子供は微細なる點まで委しく注意し、或る兒童は細かな點に向氣の附かぬことを發見するであらう。或るひは彼等をして先きに教へた物語を述べさせ、而して彼等の言ふ所の差異に注意せよ。女兒の一半に人形を與へ他の一半にリボン及び布の切れを與へよ。男兒の一半に繪具を與へ他の一半に紙と小皿とを與へよ。而して仕事に忙がしい風して密かによく彼等の爲す所に注意せよ。彼等に、新奇で之れを用ゐるに工夫を要する玩具を與へて何の子供か最初

にそれを使ふ方法を案出するかに注意せよ。彼等全躰に簡單なる謎々を課して何の子供が眞先に解くかを見よ。繪畫を示して各兒童が如何なることに注意するかを見よ。彼等に環色をつけた棒、南京玉、長く裁った色紙、筆、柔らかな土、針及び糸等を與へ彼等がそれを材料として何を造り出だすかを見よ。殊に何の子供が自ら案を立て、何の子供が只だ他の工夫した案を摸倣するかを見よ。彼等は其の新案の思想を何處から得たか、男兒と女兒とどちらが想像に富んで居るかを見出だせ。又何の子供が繪畫を見て形狀よりも色彩を喜ぶかに注意せよ。若し、是等の觀察によつて兒童にかゝる差異あらしむる所以の原因を發見し、吾等の與ふるわづかの暗示が多大の影響を兒童に及ぼすことを知らば、是等の研究もあつてから特殊の價値を得來たるわけである。

上に指示した研究法は主として幼稚なる兒童に當て箝める方法として案出したものであるが、稍、長じた兒童を試験するに適當なる方法も之れに準じて考ふれば容易く考へ出たさるゝてあらう。さて、幼い兒童を試験した記録と稍、長じた兒童を試験した記録とを比較して年齢によつて想像が如何ほど違ふかを發見せよ。

時には新奇なる題目が非常に彼等を喜ばしめる。時には想像する事物の影像が頗る速かに形づくられる、時には其の想像が優美で物に感じ易くなる(即ち優美で感じ易いといふことが其の時期の特色となる)。或るひは段々に箇性の影を現はして來る。或るひは情緒及び思想の傾向に従つて華美を好むようになり又は實利を愛するようになる。彼等に浦島太郎、大黒様其の他いろ／＼の物語を讀ませ、次ぎに彼等をして彼等自身の言語を以て口づからそれを語り出だせしめよ。又は彼等をして日の出、夕陽、山水等の景色、前日の大雷雨、古き水車小屋等に就いて話さしめ、而して或る兒童の話は單に平明にして飾りが無く、或る兒童のは多くの形容を以て彩らるゝを注意せよ。即ち吾等は、或る兒童の想像は極めて實際的で、或る兒童のは極めて夢幻的、空想的、又或る兒童のは確實で根據があり、或る兒童のは支離滅裂で全く獨創力を缺いて居ることを見出だすであらう。

想像は其の最高の意味に於いては創造的なるものである。此の意味からいへば、想像は大なる眞理を表はし得る僅かの感覺的材料によつて、普遍なる思想を表彰する形を出來さうと求めるものである。其の價値を定むるものはそれが擧ふ

所の意義の多少で、其の題目とする所は人心に於ける最深の情緒である。少年が深く考へ深く感ずるようになるに従って、段々に自然及び藝術の深い意味を捉らへ得るようになり、従って自分でそれを發表しようと望むようになる。此の簡單なる講義に於いては此の推移發達を詳しく説くことは出来ぬが、兒童の想像が純粹なる機械的作用から高等なる創造的活動に進みゆく過程は最も趣味ある又結果多き研究の一つである。

知覺、攝覺及び記憶は其の形づくる心畫を精密に造り上げる爲めに想像の助けを藉ることが甚だ多い。即ち想像の助けなしには知覺、攝覺、記憶等が完全に成り立ち得ぬというても差支ない。しかしながら、時としては其の想像が非常に活潑に働いて事物の聯想させる要素(即ち事物其の物に存せざる附加的要素)が事物に實有なる要素を蔽ふ所から兒童が事實と想像との境界を辨じ得ぬようになり、自分で自分を欺くようになることがある。かく兒童が舊經驗に存在した要素と現在の新經驗に存在する要素とを區別し得ぬことがある故に、其の記憶に存する心畫が少しも宛てにならぬ場合が屢々ある。事實と想像との混淆ともいふべき一種

の記憶違ひは子供に於いては屢々あること而して此の混淆の爲めに兒童は屢々責任の無い又は全く非難すべき謂はれの無い虚偽の爲めに罰せらるゝ。

時として想像を分ちて二種とし、他人の組み立てたものを理解し評價するものを所動的想像 (passive imagination) といひ、自ら構成するものを能動的想像 (active imagination) といふとがある。但し此の語は區別上の助けにはならうが、想像が其の本質からいへば凡べて能動的のものなると及び他人の構成した想像の發表指示する所が如何ほど完全であつても猶ほ之れに接する者が其の意味を理解するには己が心の裡に自分自らの畫を組み立てる必要あるとは、誰れでも容易に認め得べきことである。世界第一の名畫でも如何にしてそれに遠近、凹凸、意義、生命を與ふべきかを知らぬ者に取っては只だ種々の顔料を塗りつけた畫布たるに過ぎぬ。其の他彫刻、音樂、詩歌等の諸藝術界に於ける大産物でも其の意義精神を迎へ取ることの出来ぬ者に取っては單に物質分子の集散離合に過ぎぬであらう。

心畫を形づくる他の諸活動と同様に、想像も亦始終聯想及び指示の法則に従つて働くもので、其の諸の經驗を結合して新たな心畫を構成する際には往々些少

の刺激にも影響さるゝことがある。而して想像が其の活潑自由なる翼を搏つかつて心界に翱翔する時は、空々如たる無一物にもよく燦爛たる美衣を著けしめ、有るか無きかの小事物にもよく美觀と實用とを併せ具へしむる。文學の世界を美はしくし賑はしくするもろくくの詞態フレイヤットは凡べて吾等が此の靈なる作用に負ふ所である。

兒童の想像を養成し、指導し、支配するには、先づ彼れをして高等なる理解力と熟練とを具へしめねばならぬ。兒童の各心作用は凡べて想像を建築せむとして進み行くものといつても可い。人の理想の高下、運命の善惡等は凡べて懸かつて其の人の想像力の性質及び發達の程度の如何にあるといふことが出来る。

第十七章 知と其の作用と

其の二、概念判定推理

心の諸の活動は程度の差こそあれ、いづれも複雑なもので一つの活動が起これば、之れに伴つて他の幾多の活動が起こる。即ち、嚴密にいへば、單獨孤立の活動は實際全く有り得ぬもので、今日普く用ゐらるゝ心作用の名稱は唯だ學者が便利の爲め意識の上に最も著るゝ現はるゝ活動を主として呼んだものに外ならぬ。知の諸作用も亦然り。想像は其の材料に關しては記憶に依頼し、記憶は知覺に、知覺は感覺に依頼する。又前に説明した通り、或る度までは之れを逆まにして感覺は知覺に依頼し、知覺は記憶に、記憶は想像に依頼すといふとも出来る。而して攝覺は是等を凡べて含んで居る。是等の知的作用は已に上に説いた所であるが、之れに附け加へて説くべき、而して是等よりも更に高等に更に通通的なる知力作用は概念判定及び推理である。

もと、此の概念(conception)といふ語は二重の意味を有して居た。即ち一方に於い

ては知覺即ち箇物的觀念と同義に用ゐられ、又之れと共に類の觀念を意味するものとして用ゐられた。されども、前の意味は今日已に廢りつゝあるもので、今は一般に後の意味に用ゐられて居る。それゆゑ、此の講義に於いては、唯だ遍通觀念としての心畫にのみ此の語を適用する。類の觀念は箇物の形づくらくるゝ手續と同じく、分解及び總合の兩作用によつて組み立てらるゝものである。例へば、茲に一人の子供がはじめて種類の異なる數箇の林檎を見たとき、彼れは先づ一箇の林檎を取つて之れを檢べ、其の形が殆んど球狀を成して、其の一端の著るく凹んだ處に軸があり、他の一端は少しく凹んで其處に發育の不完全な葉が著いて居るのを見るであらう。彼れはそれから外皮を檢査して其の色彩、光澤、粗滑等を知り、肉の内部を檢しては其の組織、味はひ及び種子、種鞘の種類等に注目するであらう。是に於いて更に他の林檎を檢して二十箇三十箇にも達すれば、彼れはいづれの林檎も悉く是等の點に於いて一致して居るとを發見する。尤も、一つの林檎は他の林檎より大きく、或るものは甘く、或るものは澁く、或るものは綿を噛むように、或るものは柔かく、或るものは硬いといふ差別はある。又色にも大いなる違ひがあり、

大鉢の形にも多少の差ひはあらう。けれども其の共通顯著なる類似の點が屢々繰り回して注意さるゝ中に、それが意識の中に明瞭に印象を遺して、つひに林檎といふ一類の觀念即ち心畫が纏まつて成り立ち、それから後は、是等の特性を具へて居る物をのみ、林檎と認めるようになる。而して此の遍通の觀念即ち心畫が取りも直さず林檎の概念である。次ぎに他の例を取つて、兒童が無數の綠葉を檢すると、假り定めむに、各の葉はそれぞれに其の全鉢の形狀、縁の切れ工合、厚さ、色、脈の支出方等を異にして居るけれども、其の平たいこと、真中に中肋があり、それから多くの支脈が分かれ出でて細かな網組織を成して居ること、其の中心が柔軟なる細胞から成り立つて居ること、軸によつて枝に接して居ること等の諸點は、各の葉に共通なることを見出だすであらう。而して是等の類似共通の要素が結合して、一般の葉といふ心畫——此の葉其の葉といふ箇々特殊の葉ならざる、而して通常一般の葉が凡べてそれに當て嵌まる心畫——が成り立つので、吾等が土を以て葉を摸造し紙を裁つて葉を作り、或るひは筆墨を以てそれを書く時には、必ず此の遍通觀念即ち共通の心畫に據るのである。是れは單に林檎と葉とに關して眞理なるのみなら

ず、三角形、四角形、圓形、魚、龜、禽、獸、星、辰、家、屋、馬、車、船、舶、花、卉、其、の、他、凡、べ、て、の、物、に、關、し、て、眞、理、で、あ、る。

上の理由により概念(Conception)を定義して、一つの類に含まるゝ凡べての箇々物がよりて構成されるゝ一般の過程を標示する心像というて可い。換言すれば一類に含まるゝ箇々物の類似の點だけが意識の中に痕を留めて、一つの纏まつた心像となつたもの即ち概念である。例へば、三角形の概念は三箇の邊と三箇の角とを有する多角形といふことである。而して吾等の心に只だ此の心像さへあれば、吾等は概念の要求する所即ち三箇の邊三箇の角を具へて居るといふ點の同じき外には少しも同じき所の無い千種萬種の三角形を形づくる事が出来る。斯く概念は類を標示するものであるが一つの類が他の類から區別されるゝ爲めには、或るひは僅かの要素が概念の中に入ることがあり、或るひは多くの要素が概念の中に入ることがある。單純なる方の例を挙げれば、生命のあるといふことは生物を非生物から別かたむが爲めに生物の概念の中に入る唯一の要素、脊椎は無脊椎動物から有脊椎動物を固體であることは水から氷を別かつ所以の唯一の要素である。

勿論是等の中のいづれの場合に於いても、其の他に幾多の特殊なる要素が含まれて居るに相違ないけれども、其等は主なる要素に従屬して居ると見らるべきもの、従つて其の主なるものを提掲すれば、そのづから其の中に含まれて居るべきものである。多くの要素が概念の中に入るものとは、例へば、人間といふ概念の類である。人間といふ概念の中には四肢を具へて二肢にて立つもの、理性を具へたる動物、笑ふ動物、萬物の靈長など、其の他いろいろの要素が含まれて居て到底其の中の一、二で言ひ盡くすことが出来ぬ。従つて人類を他の類と區別するには是等の少なからぬ要素が其の概念の中に入らねばならぬ。

上に説明した通り、概念の構成されるゝ過程を分解すれば、次ぎの如くである。

- 第一、類の中に含まるゝ凡べての箇物に共通なる特殊の要素に注意すること、特殊の要素とは、例へば、林檎に於ける球形、葉に於ける中肋、三角形に於ける三邊、三角、生物に於ける生命のたぐひ。

第二、一の類及び他の類に含まるゝ箇々物に於いて發見した要素の比較、及び其の異同の證明。

第三、一の類に含まるゝ箇々物から漸次に共通の要素を分離抽出し、心の中に於いてそれを純粹なる抽象的心像に形づくること。

第四、類の中に含まるゝ凡べての箇物に遍く通ずると認められた幾多の要素を一つの纏まつたものに組織して本當の概念に造り上げること。

概念は先づ此のような、續て成り立つものである。而して、其の檢べる箇物の數が多ければ多いほど、又、共通の要素を見出だし各要素の異同を辯別する際に注意が行き届けば行き届くほど、其の結果たる概念が益々精確に益々完全に出來上がること言ふ迄もない。

前節に述べたことを一層明らかにせむが爲めに、試みに異なる材料から成つた數箇の立方体を兒童に示し、彼等を助けて其の概念を構成せしめ、而して其の構成さるゝ一歩々々の段取りに留意せよ。さて兒童が立方体に關して明瞭なる概念を得たと思はるゝ時に、前に與へた立方体を其の面前より取り去つてその代はりに粘土を與へ、それを以て立方体を造らしめよ。さすればさきに與へた概念の定義の意味が一層明らかに分かつて來るであらう。或るひは兒童を助けて四角形

の心書を形づくらしめたる後筆を與へてそれを書かせよ。さすれば前に言ふたことが尙ほ一層明らかになるであらう。斯様なたぐひの實驗を幾度も試みれば、おのづから觀念構成の過程に於ける各段取りの價値が明らかになり、従つて各段取りがいづれも兒童の生活に重大なる關係のあることがわかつて來よう。斯様な研究によつて吾等は或る兒童は容易に事物の重要特殊なる共通(即ち類似)の要素を看取し、或る兒童は唯だ物によつて異なる皮相の要素に注意することを見出だすことが出来る。一例を擧ぐれば、一兒童は林檎の球形をなした所に眼を著ける時に他の兒童は其の色に注意し、一兒童が葉の中肋及び葉脈の組立方に留意する時に他の兒童は其の周邊の輪廓に氣を取られて居る。此の中前者はよく肝要な根本的類似の要素を發見したものでかくすれば正しい概念が容易に組み立てられるが後者は物毎にかはる不同、非類似の要素に注意したもので到底立派な概念を形づくり得ぬものである。

凡べて知識を得る心作用は、其の過程の單純なると複雑なるとにかゝはらず、一つとして概念即ち遍通觀念の影響を受けぬはない。知識を得る過程は取りも直

さず^{ユニバーサル}遍通にする手續詳しくいへば箇々の概念を用ゐて遍通の概念を築き上げる手續である。箇々の事物の意味は畢竟唯だ其れが屬する類の中の箇々物に遍通なる要素の中に見出ださるべきものである。故に兒童を教育する者は巧みに之れを導いて精確に迅速に且つ廣く多くの事物を含むように概念を形づくらしめねばならぬ。是れ兒童を教育する者の常に留意すべきことである。

判定^{Judgment}は事物の關係を發見し、認定する過程である。此の作用は知識の模型的活動と稱された。事物には同一及び相異の二大關係がある。此の二つの關係は形狀大いさ色彩組織運動性質分量時間空間部分と全體原因と結果等其の他如何なることに關しても見出ださるゝものである。あらゆる文章は形式上悉く判斷を表はしたものである。例へば子供が「林檎は赤い」といふ。これは林檎の色が彼れの心に存する「赤」といふ畫に一致す(即ち同一なり)といふことを意味して居る。彼れが小刀を鋭いといふのは其の小刀の刃の切れ味が彼れの心に存する鋭利といふ觀念に一致したことを意味して居る。其の他犬が「はやく走るといひ家が大きい」といひ、時間が長いといひ、樹木が遠方に見ゆるといひ、火鉢が暖かいと

いひ鐵が重いといひ、赤坊が泣いて居るといふ、凡べて此の同じ道理によつて説明することが出来る。前節に知識を得る過程は即ち遍通にする過程であると言つたが、今上に擧げた各文章を見れば明らかに知らるゝ通り、其の主格は箇々物、其の主格に就いて何事かを叙する叙詞^{アジクエト}は抽象的の遍通なる觀念即ち概念、而して其の概念は已に前以て兒童の心の中に構成されたもので、主格たる箇々物との間に親密なる關係を有するものである。而して兒童は單に、其の物(即ち箇々の物)の屬する類の中に其の物を見出だし、又其の物を置くのである。赤い物の中に林檎を、鋭い刃物の中に小刀を、疾く走る者の中に犬を、大いなる物の中に家屋を、長い物の中に時間を、隔たつた物の中に樹木を見出だすなど、悉く同一の例である。かかるがゆゑに各の判定には各の文章に於けると同様に、一の知覺と一の概念とがあつて知覺は主格に於いて表はされ、概念は叙詞に於いて表はさるゝ。前者は箇々の物、後者は遍通のもの、而して判定は此の二者の一致するか一致せざるかを決定するものである。故にまた判定を定義して箇々の中に遍通を見出だす心作用といつても可い。判定が正確なるには左の三件を具ふることを要する。

(一) 知覺即ち箇物觀念の正確なること。
 (二) 概念即ち遍通觀念の正確なること。
 (三) 此の二觀念の一致不一致を定める基礎となる比較の正確なること。
 此の三者のいづれかに不正確なる所があれば、其の結果必然誤った判定を生ずることになる。是に於いて吾等は、又知識を得る各の過程が如何ほど密接に相關係し相依頼するかを見ること出来る。若し、吾等の心の中なる物像が、悉く吾等は其の物に關して知り得たることを以て形づくらし、ことを想ひ起こさば、吾等は其の心像に於ける各要素が悉く判定の結果なることを見るべく、又吾等が事物に關して下す各の肯定的判定は悉く、其の事物の心畫に新要素を加ふるものなることがわかるであらう。箇物觀念に關して眞なることは遍通觀念に關しても亦眞理である。従つて判断は又あらゆる攝覺にも含まるゝ。判定は最初は類似と差違とを發見する形式的努力として意識に現はるゝけれども、段々經驗を積み事物を知つて來るに従つて容易に事物の屬性を看取(即ち攝覺)するようになる。判定は又攝覺を證明する方便としても役に立つ。心理的にいへば、判定の眞妄は、それが、

已に心の中に成り立って居り、而してそれに関係のある他の判定と調和するとせざるによつて定まるのである。

兒童は極めて幼い時分には直覺的に、即ち特に骨折らずに類似と差異とを認めるように見える。けれども已に説明した通り、斯くして發見した類似は價值ある根本的の者でなくして寧ろ淺薄なる皮相的のものである。此の時代に於いてはまだ眞の判定作用が始まらぬ。兒童が形式的判定を爲すようになるのは彼れが此のうぶな境を通り越して、モット奥深い、事物の精髓になつて居る類似を見出すようになり初めた時である。吾等は此の點に於いて兒童の判定と大人の判定との間に存する主要なる差違を發見することが出来る。事物の精髓及び遍通的要素は、經驗と教育とを待つて始めて知識し得べきものである。兒童の判定は狭い範圍、僅かの事柄に限らるゝ。それは殆んど具象的の物のみに對して働き、言はば衝動を距ること遠からぬものであるが、經驗を積むに従つて段々と發達してゆく。試みに子供等を集め、黑板に長短相異なる多く横線を書いて其の長さを判定させ、離れて立って居る人の脊丈を判定させ、或るひは同じような紐や布片の色

橙・蜜柑・柚子・草木の葉・穀粒等の如き類似したるものの相違點、或るひは著るく相異なる物の類似點を判定せしめよ。さすれば吾等は各兒童の判定力に大いなる差等のあることを發見するのみならず、判定する物の種類の異なるに従つて各兒童の判定が大いに違つて來ることを發見するであらう。能ふべくは、各の場合に於いて其の然る所以の原因を見出だすが可い。

判定の本領は直接の比較によつて二箇の事物、或るひは思想の間の關係を見出だすに在る。此の過程は一に含蓄推論 (implicit reasoning) とも稱さるゝ (判定といふ語の方が確かに優つて居るけれども)。然るにこゝに二箇の事物が直接には比較されずとも、第三者の媒介を假りて間接に比較され得る場合がある。此の過程は「或る同一事物に等しき、或るひは似たる事物は互に相等しきか、或るひは似たるものである」といふ原理も少し解り易くいへば、乙と丙とが各、甲に等しいか、或るひは似て居れば乙と丙とは互に相等しいか、或るひは似て居るといふ原理に根據して成り立つものである。若し、三に一を加へたものが四に均しく、又二に二を加へたものが四に均しくば、三に一を加へたものは二に二を加へたものに均しくなければならぬ。若し甲の持てる杖の長さが三尺で、乙の持てる杖の長さが又三尺ならば、二本の杖は其の長さの均しいものでなければならぬ。若し二本の鉛筆が各、他の一本の鉛筆に等しくは、三本は凡べて同一のものでなければならぬ。若し猫が隠し得べき爪を具ふるもの、而して此の動物が猫ならば、此の動物は隠し得べき爪を具へたのでなければならぬ。若し人間が凡べて死すべきもの、而して徳川家康が人間ならば、徳川家康は死すべきものでなければならぬ。此の過程はまだ單に類似を見出だすだけの過程、即ち事物を一致せしむる方の單純な過程であるが、それでも二つの事物を結び合はす爲めに媒介たる第三者を用ゐるもので、判定に比ぶれば遙かに複雑である。

上に述べた理由により、推論 (reasoning) を定義して、或る事物の關係を他の事物の媒介によつて見出だす知の作用といふことが出来る。如何なる推論の過程でも之れを約して其の形を簡單にすれば、悉く三段論法 (syllogism) の形式を取るようになる。而して三段論法は只だ三箇の觀念より成り立つものであるから更に明確にいへば、推論は單に媒介たる第三者を通過して、二箇の觀念の關係を見出だす働

きであるといふて可い。茲に吾等は判定には二箇の觀念があり、而して推論には三箇の觀念があることに注意せねばならぬ。判定の要素即ち名辭(Term)は觀念である、而して三段論法の要素は判定で、三段論法に於ける判定は各、二箇の名辭を有して居る。次ぎに掲げたるは三段論法の一般形式である。

第一、イはロなり。

第二、ハはイなり。

第三、故にハはロなり。

イの役目は容易に知らるゝ通り、單に媒介として役立つので、其の媒介によつてロとハとの關係が発見されるのである。若し第一の判定が眞で第二の判定も亦眞ならば第三の判定は必然に眞である。第一の判定は大前提(Major premise)と稱せられ、第二は小前提(Minor premise)、第三は斷案(Conclusion)と稱せられ、而してロは大語(Major term)、ハは小語(Minor term)、イは媒語(Middle term)と稱せらるゝ。媒語は二箇の前提の中少なくとも其の一つに於いて遍通觀念即ち一般觀念でなければならぬ。大語と小語とは如何なる位地に置かるゝ時にも必ず同一事を意味するものでな

ければならぬ、即ち互により多くを意味しても、又より少くを意味してもならぬのである。此の三段論法の形式を解し易くする爲めに、左に事實に依つて説明しよう。

例の一

大前提、凡べての植物は、植物液でふ循環液を具ふるものなり。

小前提、此の物は、植物なり。

斷案、故に、此の物は植物液でふ循環液を有するものなり。

例の二

大前提、凡べての雀は鳥なり。

小前提、此の動物は雀なり。

斷案、故に、此の動物は鳥なり。

他に之れに類した性質の三段論法を澤山作つてかような過程の合理なるか否かを研究せよ。

茲に説いた推論の方式は、演繹法、或るひは、演繹論理(Deduction or deductive logic)と

稱せらるゝものである。演繹法は一般の原理より出立して特殊の事實に進み行く推論の過程である。其の大前提は常に必ず萬人の一致する若しくは其の真理たることの確と證明された原理でなければならぬ。大前提が萬人の一致する原理である場合は左の三段篇法に於いて見ることが出来る。

大前提 四つの均しき邊と四つの直角とを有する多角形は正方形と稱せらる。

小前提 此の多角形は四つの均しき邊と四つの直角とを有す。

斷案 故に此の多角形は正方形なり。

演繹法と相對して歸納法或るひは歸納論(induction or inductive logic)と稱せらるる推論法がある。歸納法は箇々の事實より一般の原理若しくは法則に進みゆく推論の過程である。演繹的三段論法の大前提は萬人の一致する所か定義か若しくは何等かの方法によつて疑ひの無い真理たることが證明された判定でなければならぬ。然らざれば推論の基礎となることは出来ないのである。而して一判定が疑ひの無い真理たることを證明するものは歸納法の他に無い。假りに最初

に擧げた三段論法の實例の大前提凡べての植物は植物液でふ循環液を有すといふ立言(即ち判定)に就いていへばこれは先づ一の植物を檢べて次ぎに他の植物に移り漸次種々の植物に研究を及ぼして終に殆んどあらゆる植物のあらゆる變化の状態を究め盡くし其の結果あらゆる植物が循環液を有することを見出だして此の立言を爲し得るに至つたのである。但し人間の經驗に限りある必然の結果としてありとある植物を悉く檢べ盡くすことは出来ぬが非常に多くの植物又其の植物の非常に多くの状態に於いて眞なることは凡べての植物に於いて眞なるものと假り定めて茲に、

凡べての植物は循環液を有す。

といふ全を蔽ふ立言を爲すのである。

歸納推論の過程に於ける斷案(或るひは結論)は自然の一致といふ信念詳しくいへば自然界の事物には一致統一があるといふ一般の信念を基礎として成り立つものである。即ち歸納法は一つの類の代表者と見るべき澤山の物又其等澤山の物の變化する種々の状態に就いて研究し而して一つの類の代表者に關して眞な

ることは其の類に屬する凡べの箇物に關しても、又、一類全體に關しても眞なりとして採用し得るものとするのである。而して歸納推論に於ける事實は凡べて吾等の實驗より取り來たるものである。

兒童は、速かに其の經驗から普通の斷案を抜き出だすことを學び知るものである。熱い湯、熱い蒸氣、熱い火箸、熱い暖爐、熱いラムブのホヤは皆彼れの手を火傷させる。彼れは是等の事實を見て早速熱い物は必ず火傷をさせるものと斷定する。而して彼れは直ちに此の斷定を大前提として左の如き演繹的三段論法を形づくるのである。

大前提、熱い物は我れに火傷させる。

小前提、此の暖爐は熱い。

斷案、故に此の暖爐は我れに火傷させるであらう。

多くの場合に於いて概括の仕方、斷案に達し方の早過ぎるが兒童に通例である。彼れは屢、只だ一回の經驗を基礎として大膽にも普通の斷案を立てる。一匹の犬が一たび彼れに咬みつけば犬といふ犬は悉く人に咬みつく者といふ斷案を下す

一度苦い藥を匙に盛つて與へれば匙に盛つたものは凡べて苦いと考へる。或る女兒は一度美しい婦人に菓子を貰つたところから菓子を與へる人ではさへあれば、誰れでも之れを美人と呼んだ。斯様なことは餘程年とつた子供にも屢、見ることである。兒童が事物を概括して一類として見るようになれば、やがて其の概括した觀念を箇々の場合に應用する。テール氏の言によれば氏の幼い女兒が或る朝始めて逢うた客を見て大層羞怖^{はにか}んだが、氏が其の人が氏の親しい友であることを告げると、直ちに其の態度を改め、やがて其の人の膝に上つて年來の知人の如く馴れ睦んだ。又或る時氏が其女兒を抱き、其の頭を下に向けて楷子段を降らうとした所が、其の子供は直ちに跳ね上がり、其の腕を氏の頭に捲きつけて、お父さん、わたしを落としなさいのか」と叫んだ。そこで氏は大丈夫だよ、お父さんがどうしてお前を落とすものかと答へたけれども、だつてお父さん、これが何といつても落ちるときは、身振なんだから、というて聽き入れなかつたと云ふことである。

證明(Proof)とは一の事實或るひは原理に關して知力作用を納得させることをいふ。證明は或るひは觀察より來たり、或るひは實驗或るひは推理より來たる。信

憑すべき推理は必ず確實多方面なる觀察實驗に基づかねばならぬ。兒童は觀察實驗が狭く従つて極めて僅かな證據にも満足する傾向があるから其の意見はまことに動かされ易く愉快なると便利なるとが現はれて來た時には殊に容易に動かされる。ヘンリーは其の母に球投げを遊ぶなと命ぜられて、堅く其の命を守るべきことを約束したが、其の遊技にかけて自分が校中第一なることを知つた時につひ堪忍袋の緒を切つた。兒童の推理力は主として具象の物によつて養はなければならぬ、而してそれを開發してよく抽象的推論を爲すようにならしめる方法手續に關しては、殊に細かい注意を要する。兒童の知力は決して一足飛びに抽象的推論を爲すようになり得るものではない。それは他の心作用と同じく歩を追うて自然に發達するもので、具象的の事を理解することを長く練習して始めて抽象的の事を理解するようになり得る。只だ無闇に抽象的理解を強ふるは結局兒童の心の健全なる發達を妨ぐる所以である。

茲に生理的方面から推理並びに知覺に關していふべきことがある。心のよりて考ふる機關は腦細胞である。而して腦細胞を圓滿に發達させるには、身體の他

の各部に於けると同じく、注意して適當なる運動をさせねばならぬ。腦の支配は大抵筋の支配と同様の方法によつて達し得る。而して其の方法とは自然の道に従つて無理なくおのづからに發展せしむることに外ならぬ。吾等は唯だ自然の道に従ひ自然の時機に應ずることによつてのみ、よく神經中樞を立派に造り上げて、之れを心作用と密に關係せしめ、日々に變化し増加しゆく複雑なる心の要求に應じて活動するようにならしむることが出来る。最近の研究によれば腦の神經細胞は相互に結び合つて、密に相關係した枝を出だしつゝ、心の活動と共に發達しゆくもので、其の間に適當なる刺激の下に協同して働く、攝覺團(新たに入り來たる觀念を攝取する舊觀念の團躰)を構造し、かくして仕事を爲す心力を無限に増加し行くものであるらしい。腦の働きの鈍い時に物事を思考することの困難なるは何人も知つて居ること、此の間の關係には人々の推量するよりは遙かに深い消息が籠もつて居る。手輕な薄べらな流行曲などを弾くことに慣れた音樂者の手が高上なる曲を奏し得ぬように輕卒に事理を思案する癖のついた腦は到底深い思索を爲すことが出来ぬ。成人の指を練つてピアノ、ヴァイオリンの妙手とならし

ひることが困難であるように、幼時より教養されぬ大人の腦を鍛へて深奥複雑なる大問題を攷究するようにならしむることはいとく難い。微妙なる心活動の現せむが爲めには、それに伴つて斯様な活動を現せしむべき鋭敏活潑なる身體機關が無ければならぬ。心が身體に關係せず働くといふは到底出来ぬとてある。若しニートンの心を樵夫の頭の裡に容れなば、其の心を働かすに適當な腦の無い爲めに策の施し様の無いとは、ピートーフュンの心と天才とが鍛冶屋の腦中に宿つても自由に働く指の無い爲めに立往生になるより尙ほ甚だしいかも知れぬ。菅公空海の心を八百屋肴屋の身軀に入れなば、其の結果として出来上がる者は菅公、空海の大知識ではなくして無智文盲なる市井の商人であらう。かるが故に兒童の思考力、推理力の教育は之れを彼れの學校生活の後の部分まで(即ち上級生になる迄)延引すべきではなく、寧ろ彼れの發達の各段階に於いて其の段階相應の教育を注意して施して行かねばならぬ。子供の時には子供に相應なる思想推理を爲すことが許さるべき筈である。兒童の感官にして正しく健全に働かば、其の思考すべきと、疑問を發すべきこと、解釋を與ふべきことはゆたかにあるべき筈であ

らう。疑問を提供して彼れを刺激せよ、彼れの眼界は日毎に廣くなり、其の觀察は日毎に深くなるであらう。

兒童の最初に掲ぐる疑問は多くは單に、此の物は何ぞといふことである。されど、彼れは直ぐに事物の原因に關して疑ひを起すようになる。彼れは物は何故にしかじかなるかといふことを知らうと欲する。吾等は其等の間によつて兒童は如何なる事柄を推理するに適當するかを察し知ることが出来る。而して吾等が若し事物に對する兒童特有の見方を熟知することが出来れば、其の推理力を發達せしむる方法を見出だすにさまでの困難は無いであらう。第一に兒童が一般に一つの類タイプについて如何なることを知つて居るかを見出だせ。彼等が若し吾等の發する質問に答へ得なかつたならば、實驗と歸納とにより彼等を導いて適當なる原理を見出ださしめよ。言ふまでもなく、其の際には、形式的機械的方法を取つてはならぬ。又細かいことをうるさく舉ぐれば、兒童の興味は即座に失せ去つてしまふであらう。通常推理を爲す際には、大人と雖も精密に三段の論式にはよらぬ、兒童に於いては尙更のことである。多くの場合に於いては、媒語は一舉にし

て大小の兩語を結び付け、兩者の同一なることが直ちに布告さるゝ。例へば、鳥といふ媒語は直ぐに「飛ぶ者」及び「雀」といふ兩語を結び付け而して直ちに雀は飛ぶ者なりといふ斷案を下すように見える。

要するに、吾等は知識を得ることの目的は畢竟一般觀念即ち通通觀念を築き上げるに在ることを記憶し、又判定の目的は已に形づくつた心像に他の新要素を加ふることにありと同一く、推論の目的も、其の手續は少し長いが、矢張り之れと同様の目的に役立つものなることを記憶せねばならぬ。

第十八章 自我、習慣及び品性

自我 (self) といふ語は前の諸章に於いて已にしばしば用ひて來たが、茲に一際明瞭に其の意義を説明しようと思ふ。自我とは意識現象が不斷に生起する主體として、の兒童或るひは大人を意味する。即ち自我は外界からの刺激に反應するもの、又感じ考へ且つ意志するもので、其の種々の活動が謂はゆる心を組み立てるのである。自我は、丁度實體が其の性質及び屬性から區別されると同じように、是等諸の活動から區別される。要するに、自我の自我たる精髓は其の屬性或るひは活動を具ふる點に在る。故に自我の屬性活動を知るは取りも直さず自我の本體即ち吾等自身及び他人の何たるかを知る所以である。

通例諸種の心的活動を説明する時に、各活動が自我の中の獨立した部分である、諸活動の中の一つが働いて居る時に他のものが休んで居ると説くことが屢ある。けれども、是れは不精確なる説たるを免れぬ。近世の心理學者の説によれば自我はあらゆる場合に於いて統一ある不可分割の一體として働くものである。其の意

に以爲へらく、あらゆる活動は其の時に於ける自我全體の働きてある。故に若し攝覺作用が起れば其の攝覺する者は統一された一體としての自我でなければならぬ、回想作用が起れば其の回想する者はまた一體としての自我でなければならぬと。あらゆる知的活動が密に相寄り相關係して居ることはかくして益、明らかになされた。

自我の爲すことは如何なることでも悉く自我の上に反應して前よりは益、容易く且つ迅速に同じ事を爲す能力を自我に具へしむる。例へば指の運動の如き、同一の運動を繰り返し返せば繰り返すほど引、強く一々の運動をば益、容易く益、速かに仕遂げ得るようになり、従つて骨だ容易迅速なるのみならず益、立派に其の結果を挙げ得るようになる。さて斯く同じ運動を繰り返しかへす結果として指頭に著へるものは何ぞといふにそれは畢竟二度目から前よりは少し手際よく又僅かの骨折りで同じ事を仕遂げ得る能力に外ならぬ。此の能力を層一層と増しつゝ進めば遂には指が恰も本來其等の特殊の運動を仕遂げるために組み立てられたかと思はるゝように熟し來たり而して其の効果が益、著るく擧がって來る。之れと

同様に諸、心的活動は悉く自我に反應して、断えず自我を組織し、其の活動力を増加し行く。吾等はかくして熟練に達し、又容易に爲し、廣く知り得るようになるのである。かくして各等の傾向性癖等は形づくらるゝのである。兒童の活動は客觀的で始終自我以外の事物を思考し自我以外の物に働きかけて居るようであるけれども、其の實、彼れ、自身を造つて居るのである。兒童の周圍に在る事物、其の伴侶、其の書籍、其の遊戯等が其の品性を築き成す上に驚くべき意義價值關係を有するのは此の理由あるが爲めに外ならぬ。心的食物及び心的運動の性質が心組織の性質に影響することは體を養ふ食物及び物理的運動が身體組織に影響するよりは遙かに多い。

上に説いた通り、同一の活動を繰り返し返せば繰り返すほど其の活動に熟練して來るのが普通であるけれども、研究の結果、或るひはそれとは全く反對なる事實の現はれて來ることがあるかも知れぬ。けれども其等の事實は、之れを遺傳性の餘力と見、若しくは初めに看落とした事の影響と見て解釋することが出来るであらう。是等の事に關して更に詳しく攷究したいと思ふ人はホルランド氏の『社會の底な

る逆流』(J.G.Holland's "Social Undertow")を讀まれよ。

さて是等の諸活動が一纏めに組織されて自我の一部分となつたものが即ち謂はゆる習慣(Habit)である。如何なる活動も初めには多少疎遠で親しみがなく又之れを行ふに多少困難を感じるが、それが次第に慣れて我れに親しくなり且つ容易に行ひ得るようになればおのづから融化して自我の一部分となつて来る。自我の一部分となり得ぬ者なり難い者にして自我に親しい者はない。而して理解と反復とは、最もよく自己と活動との間に此の關係を附けて習慣を成さしむる二大要素である。但し反復するだけでは只だ機械的に關係をつける傾きがあるから理解といふ要素が之れに加はらねばならぬ。又理解しただけでは習慣となり得ぬ故之れと共に理解したとを反復する必要がある。つまり反復してよく解りよく解つたのを幾度も反復して始めて完全に習慣が成り立つのである。故に習慣を定義して、一つの活動が反復により自我と同一になつた結果として生ずる活動力、或るひは癖といふと出来る。吾等の心身の作用の常として最初或る動作に伴つた事件と同じ事件が起れば、其の動作が何等の意識的努力もなく我れ知ら

ず繰り返かへさるゝ傾向がある。此の傾向は、一つは列の中の、或る要素が再現すれば之れと共に其の列の全體が再現する傾きがあるといふ體的及び心的活動の法則に一致するものである。かゝる理由により、習慣の力の一つの動作を骨折らずして而も完全に仕遂げしめ、心をして自由に注意を新たに現はれた他の要素に向けしむる。例へば子供が始めて歩行するようになった時は歩むことだけに注意を取られて其の他を顧みる餘裕は無いが、それが慣れて来ると、歩きながら樹上に歌ふ鳥路傍に戯るゝ友を眺めて、而も自分の歩いて居ることには殆んど氣のつかぬようになる。更に發達すれば、何の苦もなく歩みながら鳥や子供を眺めて、其の傍ら自由に他人と談話を爲し得るようになる。七人の侍者に同時に別々の手紙を口授しながら自分も手づから一通の手紙を認めたといふシーザーの非常なる注意力なども一面習慣の上から見て解釋し得ることであらう。

教育は凡べて兒童の習慣を形づくる所以の道である。良習慣の養成を外にして教育が無い。如何なる活動でも適當なる刺激に應じて直ちに自動的に反應するほどに、十分自我と親しくなり自我と同化するにあらざれば、知識又は熟練とし

て價值ありとはいはれぬ。習慣あるが故に攝覺も出來筋や意志を支配し得るよ
うにもなれる。各人の事を爲す伎倆に著るき差等のあるのは畢竟其の事を爲す
に適した習慣の成ると成らざるによるのである。技術の妙を極め或るひは事
業を巧みに仕遂げるには先づ其の事に熟練することが必要であるが熟練とは畢
竟事を爲す習慣が出來上がって其の手續方法が深く手に入り腦に浸み込んだこ
との謂ひである。身體精神いづれの方面に於いても熟練は常に習練から來るも
ので、習練即ち稽古を積むといふのが習慣を成す所以の途である。人の強弱大小
善悪は懸かッて其の人の思考し行爲する習慣の性質如何にある。即ち人間の習
慣は其の品性を現はすもの適切にいへば、彼れの習慣即ち彼れの品性である。
活動が繰り返され練り鍛へられて習慣となれば、それが自我の永久の品性とな
り又自我を支配する力となる。あらゆる習慣は悉く箇々の活動行爲を積み重ね
て成るものである。何れの時代にも志士仁人に嚴しく攻撃されながら長へに絶
ゆることなき懶惰、虚言、自暴、自棄、約束不履行、無分別、不注意、輕佻、浮薄、短所探、嘲罵、狐
疑、逡巡等の惡徳習慣も、勤勉、節儉、清潔、精密、著實、克己、誠實、正直、溫厚、勇氣等の美德良

習慣も悉く箇々の活動が累積して築き上げた結果である。それ故、兒童をして善
美なる性格の理想を立て、之れを實現せしむることは決して出來ぬことではな
い。只だ斯く美はしき性格を具へしむるには其の性格を築き上ぐべき箇々の活
動に注意して一步步々に高き處に進ましむることが肝要で、此の進歩の過程こそ
父母師傳たる者の至れる心盡くしを要するところ、又心を盡くしばえのあるとこ
ろである。

兒童は容易に習慣を形づくり、又容易に之れを破る。これは兒童期に於いて摸
倣の本能が盛んに働くためである。大人は我を立てる方を主として摸倣の方に
身を入れぬ故に、習慣を作ること破ることも容易に出來ぬが、子供は之れとちがッ
て甚だ變はり易い。尤も此の説に對しては異論を唱へる母親も多いであらう。
まことに子供の惡習慣を改めようと苦心して失敗に終はつた痛ましい經驗は世
の母親たる人の屢々嘗めた所であらう。さりながら子供の盛んな摸倣性を利用し
て巧みに導けば大抵の場合にはさまでの困難なくして目ざす方に誘致し得べく、
従つて習慣を變改することが子供に於いて比較的容易なることは疑ひない。

但し、多くの子供の中には到底習慣改造の望みの無い者もあることを許さねばならぬ。幼い時に喫煙をはじめて遂に生涯禁じ得ぬようになる者、虚言を吐き、他の物を盗み、逢ふ人毎に喧嘩を吹ツかける幼時の傾きが抜くべからざる習慣となる者などは、其の例世に少なからぬ。世間には矯正のしようの無い懶惰なる兒童或るひは之れを罰し又は其の請求を拒めば、直ちに痙攣を起し又は肝癩を起して赤くなり黒くなる子供も無いではない。

されども、世に謂ふ習慣の中には、ホンの皮相的のもの又は兒童の發達過程の一段階に於いて現はるゝ一時的のものも少なくない。其の中には一寸した深切なる忠告により、止むを得ずば懲罰によつて容易く矯正し得るものもある。博士ハリス氏(Dr. D. M. Harris)の言によれば、氏は一少女の吃の治療を頼まれ、或る日の午後の數時間及び翌朝の僅かの時間を費やして其の少女に矯正法を施したが首尾よく効を奏したといふとである。此の少女の吃は治すべからざる身體上の不具とあきらめて久しくうち捨てられたのであつた。其の日の晝餐の時に其の愛娘が躊躇もせず發音も誤らずに滞りなく談話するを聞いた親の喜びはそも何様であつたらう。多少注意して導いてやるか或るひは適當なる法を施せば容易に直し得る習慣に對しても、到底改め得ぬと兒童の言ひ張ることが屢々ある。これは亞米利加にあつた話腹が立つと前後を忘れ眞赤になつて人を呪ふ子供があつた。母親がそれを止めるように教へるけれども効がない。其の子供も不斷は母親と同様に自分の爲方の殘酷などは知つて居るが、さて怒つたが最期まで狂氣のようになる。そこで或る日、母親は其の子供と習慣の事に就いて楽しくお話しをした末に、其の子の指に糸を結びつけ、此の糸が指について居る間は人を呪ふことはなからせぬぞと嚴かに約束した。さて翌日の午後此の子供が家を出たが、やがて、お母さん、お母さん、此の糸を切り離して下さい。早く！早く！と叫んで家に駆け込んで来た。母親が之れを見て「何ですお前は？」と尋ねると、其の子供は「何某が庭を踐み荒らしました。腹が立ってならぬから呪つてやります。早く糸を切り離して下さい」というた。狂ふように激しても指の糸の約束は忘れなかつたと見える。悪習慣を矯正する方法が往々にして意外に手近な邊に在ることは是れて知られるであらう。

已に述べた通り、子供の時には良き習慣も悪しき習慣も容易に形づくらるゝものであるから子供の活動するまゝに放任して置くは危険千萬であるけれども、さりとて、無闇に干渉抑制してもならぬ。助長するにも抑制するにも、一つの理想を定めて一歩々々それに近づかしめるようにすることが肝腎である。然するには先づ兒童に現はるゝ習慣を研究し、如何なる習慣が如何なる事情の下に生起するかを發見せよ。例へば、或る兒童は何故に始終懶けて其の日を送るか。何故に或る子供の歩き振りが活潑で或る子供のは緩慢無氣力であるか。或る子供は何故に物を書く時に口を開き或るひは唇を噛むか。何故に或る子供はさつぱりして清潔を好み、或る子供は穢く不爲躰であるか。或る子供は何故に始終物を失ひ又は忘るゝか。何故に或る子供は始終上に立って仲間を率ゐ、或る子供は何時でも他人に屈從して居るか。何故に或る子供は常に敏捷にして注意深く、或る子供は卑屈にして不注意なるか、或る子供は何故に始終女々しく不平を並べ、或る子供は傍若無人に振舞ふか。何故に或る子供は自重の態度を以て聲高く話をするか。何故に或る子供は遠慮勝ちて人怖ぢするか。何故に或る子供はめつたに過失を

せぬのに或る子供は始終大失錯をするか。何故に或る子供はめつたに物を毀さぬのに或る子供は屢物を毀すか。何故に或る子供はめつたに怪我をせぬのに或る子供は日毎に怪我をするか。何故に或る子供はめつたに質問をせぬのに或る子供はうるさく質問をするか。何故に或る子供は其の接する事物を悉く記憶するのに或る子供は直ぐに大抵の事を忘れてしまふか。何故に或る子供は眞率にして腹藏なく物事を言ひ、或る子供は黙つて容易に其の心をうちあけぬか。是等の研究をする際には一方に於いて子供を検べると同時に他の一方に於いて、子供の家族、殊に其の両親の其の子に關する報告を聞くようにつとめよ。但し、單に習慣を發見するだけでは餘り價值の無い研究である。要するに、いづれの場に於いても各習慣の起原をしらべて其の矯正法を案出することが此の研究の特殊の目的であることを記憶せねばならぬ。

また兒童が習慣を破ること及び習慣を形成することに關しても實驗を試みよ。理解力と情緒との習慣の形成及び破壊に對する關係を發見せよ。兒童は如何なる事情が起こつた時に於いて速かに習慣を破るかを見出だせ。悪しき習慣を除

去するには直接に之れを抑壓すると之れに反對なる地の良習慣を養つて間接に之れを排斥すると、いづれが容易なるか。如何なる種類の習慣(良惡共に)が一般の習慣に多く影響を及ぼすか。正しく思考し行爲する習慣を養成するには如何なる方法を取れば可いか。兒童の心作用の中如何なる要素が其の品性を固める効力を有するか。兒童の遊戯は其の品性の上に如何なる影響を及ぼすか。是等の問題を研究すると共にさきに研究した身體上、知力上及び道德上の支配が品性を形づくる過程の上に如何なる役目を有するか、其等が如何様に相依頼し相關係して居るかを攷究せよ。

されども、誠意を以て兒童の良習慣、良品性を養成しようと思ひ煩ふ者は、唯だ兒童を對象としての研究のみに満足してはならぬ。否、其の第一に勉むべきは自家の習慣品性を養ふことであらう。兒童は摸倣性に富んで居る、而して其の眞先に摸倣するは其の父兄師友たる吾等である。即ち吾等は兒童の活きたる摸範を見、吾等の姿を映す活きたる鏡である。此の一事に思ひ及べば吾等は先づ慄然として其の冷ややかなる研究の鋒を吾等自身の上に向けねばならぬ。曾て或る

田舎の音楽家が琴を弾じて居た時、數多の頑是ないのが其の椽先に集まつた。曲がすんで其の音楽家の家人が言うたには、「お前達も大きくなつたら琴を弾くか可い」。一人の子供は之れを聞いて、「私は馬車をひく、琴なんか弾くものか」といつた。一人の子供は「馬車をひく」といつた。他の一人は「花花歌留多ををひく」といつた。而して「馬車を牽く」といつた子供は馬車屋の子、「馬」といつたのは農家の「花」といつたのは博徒の子であつた。

兒童はまことに其の父母家庭の實狀を映す鏡ではないか。吾等は兒童を研究することに於いて實に自家自身を研究して居るのである。如何なる學問でも其の最後の歸著は必ず自家の品性の修養にある。品性の高からぬ人の頭から立派な光彩ある學問事業の出た例は曾て無い。

嬰兒

其の時弟子イエスに來たりて曰ひけるは「天國に於いて大いなる者は誰れぞや」。イエス嬰兒を召び彼等の中に立て、曰ひけるは、「我れまことに爾曹に告げむ。若し改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ。されば、凡そ此の嬰兒の如く自ら謙る者はこれ天國に於いて大いなる者なり、又我が名の爲めにかくの如き一人の嬰兒を接くる者は我れを接くるなり。されど我れを信ずる此の小子の一人を顧かする者は磨石を其の頭に懸けられて海の深みに沈められむ方まさるべし。」
(新約書、馬太傳)

第十九章 兒童の本能及び遊戯

本能 (instinct) とは、或る活動に出でようとする生具の性能をいふ。而して本能は知らず識らず特殊の目的を達せむとして生起する衝動の中に現はるゝもので、其等の衝動はおのづから其の目的に適うて多少の成效を見るが通例である。さて本能の活動を促す刺激は或るひは外部から來ることがあり或るひは内部から來ることがある。寒氣が北寒帯に居る雁の神経系統を刺激すれば、其の活動に出でむとする衝動が發達してやがて暖かい地方に飛んでゆく。鰲が水の中に入れば、其の新らしい境遇が自然に水を泳かうとする衝動を喚び起す。是等は刺激が外部から來るものの例である。内部から來るものは、例へば蠶が十分生育すると或る内部の刺激を感じて直ちに薄絹の隱家を紬ぎはじめ。鳥は内部の刺激に促されておのづから巢を營み出す。人類は内部の刺激によつて結婚して家庭を構へる。蓋し神経の緊張するによつて生起する盲目的衝動は歴史の初めから常に人間を刺激して種々の事を爲さしめて來たのである。斯様な衝動は自然に母

親をして其の兒を愛育せしめ、怖氣立ツた軍隊をして風聲鶴唳に逃げ走らしめ、少年をして美術家、探險家、科學者或るひは博愛家たらしめる。是等の遺傳的傾向即ち本能は主として各箇人の歴史を豫め決定するものである。

兒童は、生まれ落ちた初めに於いて已に食物を要求し、而して其の要求を満足せしむる所以の衝動は已に彼れに具はつて居る。此の事實は取りも直さず、人性の殆んどあらゆる要求を満足させむが爲め、尙ほ適切にいへば人性に潜在する可能性を實現せむが爲めにあらゆる本能が兒童に植ゑ付けられてあることを示して居る。衝動は決して目的なしに働くものではない。それは力量と熟練とを發達せしむるもので、此の二者は將來の需要を豫想して之れに應ずる所以のものである。例へば知覺的衝動、即ち感官に直現する物を知らうとする衝動は知識活動を刺激し發達せしめて、後來宇宙の大問題を考究し得るようにならしめる。摸倣的衝動は兒童の心身の活動を刺激して教化並びに進歩を可能ならしめる。また表情的衝動は各自の思想を他人に傳ふべきくさぐさの手段方法を案出させ、其の結果として人智の最も珍らしい産物ともいふべき言語、あらゆる事物を含んで居る

言語が生じ出た。

是等の衝動及び本能から科學、技藝、哲學等が生起して限りなき恩惠を人類に與へたのである。けれども、是等の本能があるだけでは、人間は唯だ自分一個の欲望の満足に快樂を見出だすといふ孤立的、私利的、我慢的の者となり、自己の利益のみ全心力を傾注して他人の利益をば少しも顧みぬ者となるであらう。従つて他人即ち同胞は只だ自己の快樂を満足せしむる材料と視られるだけで、其の周圍に在る有生無生の諸物はいづれも我れに對して動物以上の親しい關係を有せぬこととなるであらう。これでは人間の生活も餘りに淺ましく餘りに殺風景であるといはぬばならぬ。そこで吾等には更に同胞と交際して親しい關係を結び、彼等と共に居ること、彼等と同情し合ふこと、彼等と共に行動することに満足を見出だすといふ本能があり、それが人生に趣致を添へると同時にさきに挙げた他の本能にも一層高尚なる意味を與へるのである。此の本能は或る一箇人の幸福と圓滿とを目的とするのみならず、更に一種族一團體の幸福圓滿を目的とするものである。同胞と相親しまうとする此の衝動を稱して社會的[○]本能[○]といふ。

動物の中高等なる種類に属するものは、或るひは牝牡雌雄相伴うて配偶的生活をなし、或るひは群をなし仲間を形づくって生活する。人間は配偶を求めて結婚するのみならず、又仲間をなし社會を作つて生活する。隱者、遁世者、獨身者などは例外の變態と見做すべきもので決して人生の常態とはいはれぬ。彼等が風がはりの生活法は人の好奇心を惹くけれども、之れに摸倣しようと思ふ人はめつたに無い。ロビンソン、クルソーの孤獨生活は長へに讀む人聽く人の興味を惹くが之れと共に、また長へに憫れみの種となるであらう。男と女とに論なく、如何ほど強健なる時に於いても、長く孤獨で居らうと望む者はあるまい。況んや一朝病氣に冒された時に於いて、同情を寄する友ほど良い藥の無いことは萬人の經驗した所であらう。懷郷病は人類に遍く通じたる疾病である。此の社會的本能あるが故に人類は何處に於いても集合團結するのである。此の本能は人をして互に他の爲めに盡くさしめ他人の幸福繁榮に於いて満足を見出ださしむるものである。それは人をして共通の利益を認めしめ又互に相信頼せしむる。それは人間をして互に相保護せむが爲めに諸種の團體を組織せしむる。それは人をして公衆全體の爲めに種々の事業を起さしめ、學校、寺院、役所等を建設せしむる。此の箇人をして團體の爲めに計らしむる本能は、又團體をして更に大いなる團體の爲めに盡くさしめ、段々進み進んで、遂に國家の爲め、人類全體の爲め、一切衆生の爲めに盡くすようにならしめる。此の本能はかくして家庭に對する愛、血族に對する愛、尙ほ進みては、國家人類に對する愛を喚起し、かくして文化の所産たる種々の制度を生み出だす。

新生兒が極めてかよわくして他の助けを藉らずに育ち得ぬとは、已に人間の社會的動物たることを證明して居る。彼れが生まれ落ちると間もなく肉體上の要求に次いで伴侶をもとむる切なる要求が起きて来る。彼れが睡眠から覺める瞬間毎に、此の相手を欲しがると要求が如何ほど熾んに起こつて来るかは世の人の凡べて知る所、又彼れが母親の温かい懷ろに抱かれて、どのように満足するか、一家の人達をばどのようにに歡び迎へるか、同じ年頃の友に會ふ毎に如何ほど熱心なる興味を以て相語り相戯るゝか、子供同志一緒に居るといふことが、其の幸福に如何ほど必要であるか、是等は何人も認むる所であらう。多くの人は幼い時、同じ年頃の

友達の家にうるさく遊びに行く爲めに、叱られ、一室に閉ぢ込められ、紐で結はへられたことなどがあるに違ひない。子供に取つて最も興味あるものは同じ年頃の子供である。無論人形や竹馬に對しても興味を有するが、それは竹馬や人形を生命あるもの人格あるものと見ての興味であつて、また他の子供と伴ふ時に於いて竹馬人形が一層面白いものとなつて來るのである。一旦他の子供と遊ぶことの面白味を覺えた子供に取つては、それほど面白いことは他にまたと無い。年長者もやり方次第で子供の此の社交的要求を満足せしむることが出來ぬてはないけれども同年輩の遊仲間を有たぬ子供は、まづ兒童期の最も愉快なる楽しみを失つた者といつてよい。

子供の遊戯を研究すれば、それが年長者の従事する眞面目な職業に酷似して居ることがよくわかる。兒童の遊戯するや常に必ず熱心である、而して其の倦厭して興味勢力の減じて來るのは、其の身體が疲勞して休息睡眠を要する時に限る。子供は見るにつけ聽くにつけて年長者の爲す所を眞似ようと努める。彼等は家を建てる、菓子を拵へる、穀物を植ゑる、商賣をする教師になる、醫師になる、洗濯をす

る、人形に衣服を著せる、馬を馴らす、兎を追ふ、祈禱會をする、國會を開く、花園を造る、鑛山を開く、坊さんになつて説教する、兵士になつて戰鬥する。子供等が眞面目に熱心に是等の事を爲すところを見ると、彼等は斯様な遊戯を確乎たる事實と思つて居るに相違なく、又子供の本能が大人の本能とさまで違ふものでないといふことがわかる。子供等の遊戯は彼等が長じて従事すべき職業を豫示して居る。兒童の摸倣的、考案的、自己發表的、及び社會的、本能は其の遊戯に於いて年齢相當に十分發表されて居る。斯くして遊戯は兒童後年の發達を可能ならしむべき基礎的準備となり遊戯時代は兒童生活の最初の大きいなる修養期となるのである。即ち、遊戯は兒童に與ふるに體的及び知的支配を以てして、彼れが後來實務に従事する際に容易に其の業務に熟達し得べからしむるもの、要するに他の諸活動と同じく兒童に反應し彼れを助けて立派な人間とならしむべきものである。

兒童の遊戯が果たしてかくの如く肝要重大なるものならば、吾等は如何にして輕々に之れを看過することが出來ようぞ。如何なる父母、教師か兒童の爲さうと企つる事々に留意せむと勉めざるべきぞ。子供の遊戯の性質は其の食物の性質

と同じく保護者の精細なる注意を要すべきものである。遊戯には皆それぞれに特色がある。或る遊戯は熾んに摸倣的活動を喚起し、或る遊戯は考案的活動を、又或る遊戯は攝覺的、類化的の活動を發達せしむる。或る遊戯は主として判断作用の活動を促し、他の遊戯は記憶作用の活動を促す。或るものは推理力を發達せしめ、他のものは想像力を發達せしむる。或るものは筋の強さを増し、他のものは熟練を加ふる。又之れを見童の方から見れば、或る子供は終日同じ遊戯をなし、他の子供は幾度も遊戯を換へる。或る子供は静かな遊戯を選び、他の子供は騒がしい遊戯を選ぶ。或る者は室内にて遊戯するとを好み、他の者は屋外で自由に遊ぶことを好む。或る者は考案的の遊戯に心を傾け、他の者は冒險的の遊戯に心を傾ける。或る者は精神上の競争を主とする遊戯、勝負事を好み、他の者は身體上の力量或るひは熟練の競争を主とする遊戯、勝負事を好む。一端を擧げても此の通り、而して見童が是等の遊戯の中のいづれを好むかは、主に父母教師の教導法如何によるのである。近年米國で八歳以上の多數の男兒に就いて研究した結果によれば、彼等の最も多く好む勝負事は「黒人戯」「巖上嶋」「拳闘」「野球」「フットボール」等だといふ

ことである。而して彼等が其等の遊戯を好む理由として擧げた中、人を打つのは面白いからといふのは最も普通であつた。又中には殘忍なる性質の明らかに現はれて居るものもある。例へば「人の怪我したのを見るが愉快だ」とか、「人の跛ひいて行くのを見るが氣味よい」とか、「人の息の止まるのを見るが氣持がよい」とかいふような類である。兒童教育に志ある者は凡べて是等の諸點に就いて兒童を檢察せよ。男兒と女兒とが一緒に遊ぶことを好むか否かをしらべ、其の理由を發見せよ。各兒童の遊戯の選擇が何事を指示するか、兒童の選む遊戯の種類が其の學校生活の上に如何なる影響を及ぼすかを研究せよ。

凡そ兒童に遊戯を課するには、其の種類を選び其の範圍を廣くして兒童の性質の各方面が正しく又偏せずに發達するように注意せねばならぬ。幼稚園は此の目的に最もよく適合するように組織されたものである。それ故、幼稚園の原理方法等を研究すれば此の兒童遊戯選擇問題を解釋する上に少なからぬ便利があるであらう。但し幼稚園は、其の目的全く兒童の遊戯本能の健全なる發達を謀るにあるとはいふものの、元來一種の學校であるから、必然の結果として真正の遊戯に

於ける最も肝腎な要素——自發及び自由、即ち思ひ浮がぶまに——自由に遊ぶといふ要素——を十分に發揮することが六ヶしい。加之其の範圍が必然に甚だしく限られて居る。蓋し幼稚園は本來範圍の廣い家庭遊戯を排斥するものではなく、寧ろ其の存在を認め、それを利用して自分の教ふる遊戯に資せむとするもの即ち其の教ふる遊戯と家庭遊戯とが互に助け合ふようにしてゆくべきものである。前節に示した方法で兒童の遊戯を研究すれば、極めて狭い範圍の遊戯の外知らぬ子供、自分の熟知して居る種類以外に他の遊戯があることを知らぬ子供が、如何なる社會にも澤山居ることを發見するであらう。健全なる、刺激的なる、又思想を開發すべき遊戯を習はぬ子供の心身の活動は自然に狭くなり萎縮して來ねばならぬ。是等の兒童がいよ／＼學校に入り或るひは實務に就いた曉に如何なる結果の現はれ來たるべきかは察するに難からぬことである。

但し兒童が如何なる遊戯をするかといふことは無論大切な問題であるが、それよりも大切なるは如何様に遊戯するかといふことである。有益なる遊戯は已に澤山案出されてあるかも知れぬけれども良好なる結果はまだ擧がったとはいは

れない。また自然の成行に任すのは必ずしも賢明な仕方とはいへぬ。要するに最良の結果を收むるには兒童の能力と要求とに最もよく適應するように遊戯を次第して行くとが肝要である。兒童の中には或るひは一年中同一の遊戯をして喜んで居る者もあらうけれども斯くては初めの僅かな間の外は殆んど兒童の性を發達せしむることが出來ぬ。言ふまでもなく、遊戯を選択するに就いては、常に兒童がそれを面白く思ふか否かを考へねばならぬ。然らざれば兒童に對して殆んど益が無いであらう。兒童の選擇を左右するは通例さほど面倒なとはないけれども之れを左右せむとすれば、往々兒童自身の要求を顧みずして母親の嗜好する所、便利とする所に従ふ恐れがある。要するに、兒童の本能、即ち眞に兒童に適する所を見出だして、それを助長するほど安全なる方針がない。遊戯問題は母親の側からいへば深思熟考を要すべき深遠なる問題、子供の側からいへば生涯の安危に係る緊急問題である。蓋し淺薄なる兒童研究の嘴を容れ易きこと遊戯問題に若くはない。兒童の保護者たるもの猛省しなくてはならぬ。

斯くの如く遊戯は兒童に取って世人の概ね思惟するように慰み事ではなくし

て一生の大事である。兒童教養の任に當たる者は、成長した者に仕事を教へる時と同様の注意を以て、如何様に遊ぶべきかを兒童に教へねばならぬ。若し教導誘掖の法其の宜しきを得れば、兒童は其の遊戯する間に於いて精神上、身軀上、何時までも残つて生涯の爲めになるべき事を澤山に覺えることが出来る。女兒ならば人形の衣裳を裁ち縫ひして居る間に大抵一ト通りの裁縫師になれる、男兒ならば大工の真似をして遊んで居る中に錐、鑿、鉋の使用法を一ト通り學び得る。余の知つて居る一女兒は曾て人から僅かばかりの蠶兒を貰つてそれを飼育してあつたが、掃き立ての蟻蠶が桑を食ひ、四たび眠り、熟して繭を造り、蛹になり、蛾になる發育變態の消息をば、立派に昆蟲學の書物を読み講義を聽いた中學生徒よりは遙かによく學び得た。又筆と繪具とを持つて遊んで居る間にえい加減の畫師になつた子供もある。其の他談話演説の真似をして居る間に美辭能辯の呼吸を呑み込む者花卉草木の間を飛び廻はつて居る中に自然美を味ふる力を養ふ者など、一々擧ぐるに違がない。頑是なく嬉戲遊樂して居る間に得た經驗が如何ほど詩人の著作に優美なる材料を與へ趣味を加ふるかは、ロングフェロー、テニスン、ワルツワルス、シ

エクスピア等を讀んだ者のひとしく頷くところであらう。幼時の遊戯は管だ長じて後の心身活動の基礎を成す點、或るひは詩歌文藝の材料の源泉となる點から見て大切なるのみならず、實に兒童の感情品性を養ひ成す點に於いて、又永久の清涼劑慰藉劑たるべき點に於いて大切なるものである。幼時の遊戯の回想が、老年に至るまで常に人心を慰めて獎善養氣の資となることは何人も造化の賜として感謝するところであらう。

遊戯が兒童の社會的生活及び其の性格の上に如何なる影響を及ぼすかは、一に懸かりて保護者の教導誘掖其の道を得ると得ざるとに在る。故に吾等は決して彼等の運動を等閑に看過してはならぬ。二人の子供が仲よく一緒に遊ぶには、一人が始終己れの好む所を捨てて他の好む所に従ふか、然らざれば二人とも互に譲歩しなければならぬ。子供には長い間争はずに仲よく一緒に遊ぶといふことはめつたにない、従つて暫しは忍んで他の好む所に譲つても其の遊びを續ける中に私情が段々昂じて來て遂に堪忍袋の緒が切れ、其の結果腕力に訴ふるか或るひは先きに我を立てた者が譲るか、せねば極まらぬようになることが屢ある。斯様な

場合には、互に讓歩して他人の心を思ひやり他人の顔を立てるように教へねばならぬは勿論であるが、少し計りの教訓で子供に之れを會得させることは容易でない。それ故、家人殊に兩親たる者は、常に油斷なく兒童の遊戯を觀察し、同情ある勸告によつて其の我慾を抑壓し他人の上を思ひやる心を養成するようにせねばならぬ。兒童は生まれながら壓制家であつて兎角我を立てようとする傾きがある。彼れは不斷自分を支配しようとは考へずして唯だく他人を支配しようとのみ考へる。故に父母教師は遊戯の間によく兒童を教へ導いて己れを捨て人に従ふ美徳を養はしめ、他日世に出てた時に隣人として、市民として、國民として、更に進んでは人類として滞りなく義務を盡くし得るようにならねばならぬ。無理に外から附け加へ、注ぎ込んだ教訓は兎角忘れ易いが、好む所に一心を傾け居る裡に出來上がった習慣は容易に失せぬ。遊戯の輕んずべからざる所以、又遊戯の間に於ける教育の輕んずべからざる所以である。

第二十章 行儀と道徳と

社會的本能は人間の他のあらゆる本能と同じく考案的、工夫的のものである。それは單に他人と一緒に居るといふことのみを以て満足するものではなくやがて、成るべく満足に成るべく幸福に他人と生活すべき手段方法を工夫し初める。已に前章に説明した通り、兒童の社會的本能は經驗を積むと共に發達して他人の權利と尊重するようになる。他人の喜ぶのを見て喜び、他人の苦しむのを見て悲しむようになる。他人と自身とを同一視するようになる。同情、愛憐、克己、獻身等の心活動が現はれて来る。而して、此の本能の發達するや、箇人の場合に於いては、常に多少彼れ愛すれば我れも愛し、我れ憎めば彼れも憎むといふ相互交換の關係のある所から、自然に他人に對する尊重愛敬の度を表はし又他人を満足せしめ幸福ならしむる所以の方法手段が案出されて来るのである。子供でさへも夙くから他人を喜ばす道を知つて、巧みにそれを用ゆることが屢ある。此の說に對しては、子供も大人も其の他人に盡くすは畢竟他人に盡くして貰ひたい爲めであると

か、他人の幸福を希ふのは畢竟他人の不幸に陥つたのを見るのがつらくて堪まらぬからであるとかいふ利己の立場からする反對論もあるけれども、是等の論は到底茲に説く所の眞理なることを打ち消すには足らぬ。

今日善良なる社會に一般に存在する禮儀作法は此の、人間が互に協同し互に好意を寄せむとする精神から生まれ出たものである。ブッシュメン、或るひはパタゴニヤ人のような野蠻なる民族の間にも單純なる社交上の禮式はある。山賊海賊の如き破法無頼の徒の間にも其の仲間の中には一種の禮法が行はれて居る。文明國民に禮法の存在することいふまでもない。彼等は凡べて複雑なる社會の習慣に支配され、而して其の習慣は成文律同様に尊重保持されて居る。是等の習慣は家族的な生活並びに社會的生活のあらゆる領分に立ち入り、其の中には主人と婢僕、優者と劣者、貴族と平民、老人と壯幼、朋友と行路の人、同姓と異姓等の關係を含み、又道路、汽車、汽船、寺院、公會所、食堂、客室等に於けるあらゆる仕儀を包羅して居る。禮義に嫻はずして其の職業に成効し得る者は殆んど無い。人を統御する祕術は主として禮を於て之れを遇する呼吸に存する。エマールソンの語に「禮ある言語、舉

動は世界を支配す」とあるがまことに禮は朋友を作り、投票を得、敵を和らげ、他の協力贊助を得、或るひは、商賣を繁昌させ、政略を行はれしむる所以のもの、而して人類の慰藉、怡樂に貢獻することの頗る多きものである。禮儀は此の通り人生に大切なるものであるのに、それが今日の兒童教育に於いて等閑視されて居るのはまことに惜しむべきことといはねばならぬ。

禮儀が必要であるといへばとて虚禮即ち形式的、外面的の禮儀と眞禮即ち眞正の禮儀とを混同してはならぬ。前者は單に上邊を立派に感服にするのみで内心に於ける敬重の念の伴うて居らぬもの、後者は他人を敬ひ愛しむ心の、美はしく言語容貌に發現したものである。前者は多少練習して裝ひ得るもの、後者は他に同情する結果としておのづから發するものである。虚禮は場合々々に應じてわざと取り繕ふもの、眞禮は抑へむとしても抑ふべからざる心底の狀態が穂に出づるものである。虚禮は其の裏に潜める矯飾の心根を覆ふ衣、眞禮は眞摯の情の外貌に映り出た光澤である。此の故に父母教師たる者は二者の區別を明らかに會得して先づ兒童の誠實なる心を養ひ、其の結果として儀容の美がおのづから備は

る様に教へて行かねばならぬ。先づ其の心を正しくし美はしくせむと努めずして唯だ社會交際の禮式を教ふれば、其の結果遂に彼等をして上邊の修飾をのみ事とする街氣滿幅の名聞家とならしむるに終はるであらう。自利心の熾んな子供は形式的禮儀は容易に備へ得るけれども、眞の禮儀を備ふるとは頗る難い。眞の禮儀を具ふる爲め如何なる場合にも肝要なるは寛大な心温かい心及び正直な心である。眞の禮儀は兒童の心の裡に養はるべきもの、而して形式的の威儀禮容は其の心より自然に流れ出て身の外廓を飾るべきものである。唯だ多數の人の會合した席上で如何に坐作進退すべきかを見童に教ふるは抑、禮の末節に拘泥したもので、眞に禮の何たるかを教ふるには先づ家人の間、日常生活の間に於いて如何に和親敬愛の實を擧ぐべきかを知らしめねばならぬ。

兒童が禮儀正しくなると否とは主として其の家庭に禮儀が行はれて居ると否とによる。一家の長者が互に敬愛して常に他の心を樂しますよう、他に迷惑を掛けぬようにと注意しつゝ朝夕爐を擁して睦ましく語り合ふ家庭に育つた子供は、故らに求めずともおのづから父兄の温和なる氣風、容豫たる舉動を學ぶに違ひな

い。斯様な家庭に育つた子供は如何なる仲間の中に入つても常に落ち付いて確かりして居る。彼等は知らぬ人々の間に入つても少しも外面を装ふ必要を感じぬ、従つて如何なる場合に處しても取り亂すことが無いであらう。之れに反して野卑、淫猥なる行爲又は嫉妬、爭論等の絶間なき家庭に育つた子供が如何なる影響を受くべきかは言はずして明らかなることである。蓋し、家風は兒童の禮儀心を醗酵する空氣である、家風を立派にせずして子供の言語舉動の立派ならむことを求むるは木に縁つて魚を求むるに異ならぬ。

前に述べた通り、兒童をして禮儀を辯へさせるには彼等の他人に對する舉動に關して常に柔和に懇切に忠告することが肝要である。其の場合にはもとより一ト通りでない。例へば意地悪い又は我慾的なる舉動のあつた場合、或るひは怒りばく騒がしい動作のあつた時、或るひは人の言葉を遮ぎるような出過ぎた行爲、或るひは輕卒、殘忍、尾籠、野卑、陋劣、粗暴、不敬等の振舞のあつた際には、よく其の不心得を諭して後來を戒めねばならぬ。又之れに伴うて機會のある毎に、如何にして温順になり考深くなるべきか、如何にして其の發情を抑へ他人の權利を尊重すべきか、

如何にして己れを捨て、人に従ふべきか、如何にして沈著謙遜になるべきかを示さねばならぬ。是等の諸徳は凡べて禮儀を基礎として其の上に成生すべきものである。吾等はまた日常普通の禮を一通り兒童に教ふる義務を負うて居る。例へば、食事の禮、人の家に入る時及び人の家を辭する時の禮、途上人に逢うた時の禮、客を招待し響應する時の禮等に關しては、一通り其形式を教へおかねばならぬ。但し禮義は一面密に身體のこなし方に關係したもので之れを身體の品格、起居、振舞の優美なることより離すことは六ヶしい。故に是等身體的練習に關した事柄は兒童の身體的教育の一部を成すと共に又其の社會的教育の一部を成して居るのである。

兒童の社會的生活の研究には、已に説いた他の研究に於けると同じく事實の蒐集と原因の考察との兩面がある。例へば、同じ家庭に在りながら、何故に或る兒童は舉動が優雅で他の兒童は粗野なるか。何故に或る子供は交際社會の禮法に馴れて居りながら仲間の兒童に對して倨傲野鄙なる振舞をするか。何故に或る者は多數の同級生に好かるゝのに或る者は僅かの朋友しか有ら得ぬか。何故に或

る者は自然に人に愛されて評判が好いのに、他の者は頻りに人を悦ばさうと務むるに拘はらず人に嫌はるゝか。清潔の習慣德行等は如何ほど密接に禮儀と關係して居るものであるか。是等は兒童の社會的生活に關して考究すべき主なる問題である。

行儀と道德とはどちらから云つても、さまでかけ離れて居るものでない。されば獨逸の名高い教育家のローゼンクランツも道德的修養は社會的修養の精髓だと曰うて居る。蓋し上に説明した通り、社會の禮儀は凡べて社會的交際の快樂を増加しようといふ、人間本來の欲望に基づいて形づくられたもの、而して其の欲望は道德的及び宗教的生活の精華ともいふべき愛と同情とから起るものである。無論求利的動作即ち自己の利益を目的とする動作が多く、業務及び社會交際の特質であることもあらう。とはいへ、其等の動作とても他人に善を爲さうとの動機から出づれば、やがて道德的行爲となるを妨げぬ。本來求利的行爲は、得ること (getting) を目的とし、道德的行爲は、たること (being) を目的とする。人の求利的方面の力量を證するものは彼れが何物を有する(即ち得たる)か、其の道德的方面の力

量を證するものは彼れが如何なる人たるかである。前者に於いて人を優れしむる所以の特質は先見、用心、勤勉、理財、勇氣、沈著、忍耐、利己心等、後者に於いて人を優れしむる所以の特質は方正、謹直、真摯、誠實、寛容、同情、文雅、節制、溫和、純粹、深切、慈善等である。求利心は如何なる利益を得べきかといふ問を掲げ、道徳心は如何なる善を爲し得るぞといふ問を掲げる。前者に於ける動機は常に利益で、後者の善惡正邪である。前者は其の目的を達するか否かによつて判断され、後者は其の行爲する動機によつて判断さるゝ。

道徳的觀念は社會的觀念から發生する。蓋し社會的觀念は箇人間に於ける相互の關係を認むるもの、而して道徳的觀念は各箇人に其等の關係を實現する義務あることを認むるものである。苟も之れを爲して他人を益し得る事は之れを爲すのが義務である。自己の爲めになることでも、それによつて己が他人を益すべき力を増し得る事は亦之れを行ふが義務である。道徳的觀念は其の人の理想を構成するもので、其の構成した理想を實現することが義務、即ち一切の欲望に超越した最高の欲望である。義務に一致した動作を正といひ、之れに反した動作を邪

といふ。道徳的情緒、道徳的愛情、道徳的欲望等が道徳的觀念と共に發達することは容易に理解し得べきことと特に言ふ迄も無い。又道徳的支配 (moral control) 義務の命ずる所に従ひ自在に自己の活動を支配して善を行はしめ惡を避けしむる能力のことは前に説いた身軀上、知力上及び求利上の支配と同じ方法によつて達し得べきもの、而して又他のあらゆる支配の上に立つて其の目的となるべきものである。故にヘルバルトは道徳を最高目的とせぬ教育は凡べて惛れむべき混雜に終はらざるを得ぬと曰うた。

兒童は本來衝動の起るまゝに正直に動作するもので、決して偽り飾ることが無い。偽り飾らうとする心は、笑はれまい、叱られまい、罰されまいと用心し或るひは大言を吐いて豪く思はれようといふ欲望の出た時に始めて起るものである。兒童が單純な(即ち込み入つて居らぬ)出來事に就いてなかく細かい點まで注意することは、世人の概ね知つて居ることであらう。母親が前日の出來事を物語る時に事實を誤り或るひは其の一部を言ひ脱すことがあれば、乳房を啣んだ太郎は花は直ぐに嘴を挿んで其の誤謬を指摘し遺漏を補ふが常である。之れを見ても

兒童が存外正直で注意の細かいことが知られる。兒童が事實に違つたことを言ふ原因はもとより一ト通りではない。或るひは出來事のあつた時に、誤つた若しくは不完全な見方をした爲めに、後に其の事に關して誤謬を傳ふこともあらう。或るひは記憶違ひ、懶惰、不注意、無頓著等が原因となつて何心なく言つたことが巧んで虚言を吐いた様に見えることもあらう。兎に角事實相違の事を言ふ原因が如何様であつても、其の傾向をば速かに抑壓して習慣とならぬようにせねばならぬ。一たび習慣となればそれが種子となつて各種の虚偽を誘致し、延いては兒童の道德性を全く腐敗せしむるようになるかも知れぬ。蓋し、事物の真相を見ることと誠實とはあらゆる道德の基礎といふべき徳である。此の二者が無ければ到底立派な道德的性格が成り立つことは出來ぬ。

兒童が正邪善惡を辯別するに至つて始めて道德的性格を有したと云はれる。道德の萌芽は兒童が兩親を愛し尊敬するところから、兩親に「爲せ」と命ぜらるゝことを爲し、或るひは父母に禁ぜらるゝことを爲さうとする自己の欲望を抑制する時に於いて始めて現はれる。叱責懲罰を恐れて父母の命に従ふ時を以て道德の

萌芽の發現した時とするのは不當なると勿論で、此くの如きは犬猫も猶ほ爲すことである。余は曾て一人の幼い女兒が其の母に向かつて「私が此の本を讀まなかつたのはお母さんが私のそれを讀むのをお好みなさらぬからです」というたのを聞いたことがある。それは單に父母の命に従ふ者よりは道德上の階級の一步進んだ者である。しかしながら、善からぬ書物ゆゑ、それを讀むことを好まぬといふ理由を以て之れを斥くる者に比ぶればまだ低いといはねばならぬ。

試みに十餘人の兒童に向かつて、汝等は何故に道德上善いと考へることを爲すかと尋ねよ、而して注意して其の答を研究せよ。さすれば、久しからずして道德の萌芽、即ち兒童が初めに善しとし惡しとする所は動作其の物には存せずして動機即ち心根に在ることを發見するであらう。さて又兒童の答へた理由の出處、即ち其の理由を生ぜしめた原因を研究せよ。或る兒童は父母教師の言を引いて答ふるであらう、或る兒童は自分の考へ出した理由を以て答ふるであらう。或る者は適切なる格言を引き、或る者は當の問題に何等の關係も無い格言を引くであらう。而して之れを研究するに當つて、如何に見意の箇性が其の答の中に現はるか

に注意せよ。

兒童の道德的本能或るひは道德的衝動は彼れが正義を知らう行はうと努める毎にいよ／＼強くなり、之れと共に道德的衝動が強くなれば強くなるほど益、正義を知らう行はうと努めるようになる。道德的活動に於ける此の關係は他の心的活動の場合よりは餘程著るく現はれるものである。人が個々の場合に處して如何様に正義を認めるかは其の當時に形づくられて居た其の人の道德的性格如何により、其の衝動を實行に現はす動力の強弱も亦其の人其の時の道德的性格如何によるのである。兒童は初めには衝動的に正しい事を爲すこともある、又、或るひは純粹なる同情から、或るひは他人を喜ばさうといふ希望から、或るひは權威に對する服従から、或るひはそれによつて自分の利益を得ようといふ豫期から正しいことを行ふこともある。而して其の正しいことを爲すことに愉快を覺えて來るに従ひ次第に義務責任の感念が發達して來る。

兒童の徳性が立派に發達するには正義を行はうとする心活動の強くなると共に道德觀念の明瞭になることが必要である。正義に關する兒童の觀念が日々に

確定し、明瞭になるにあらざれば到底著るき道德上の進歩を見ることは出來ぬ。故に兒童は嘗だ眞理を愛するのみならず更に眞理の何たるかを知らねばならぬ、嘗だ正直ならむと努むるのみならず何うするのが正直なるかを見定め得るようにならねばならぬ、嘗だ氣高き行爲を愛するのみならず氣高き行爲を認め得る眼力を具へねばならぬ、純潔を尊ぶのみならず純潔の徳が如何なる要素から成り立つかを知らねばならぬ、同胞を愛するのみならず同胞に對して盡くすべき義務あることを理解せねばならぬ。世の人多くは消極的に善である、さりながら概ね積極的の徳を缺如して居る。

良心 (conscience) は、正邪を識別して、正しい事を行へ、不正なる事を行ふなど、命令する複雑なる心活動である。良心を簡單に分析すれば左の通りである。

- 一、正義の一般觀念即ち概念。
- 二、或る特殊なる行爲が此の一般觀念に一致するか否かに關する判定。
- 三、正しいと判定された事を爲さねばならぬと思ふ義務の感。
- 四、正しいと判定された行爲を爲すべしと努力。

五、此の努力に伴ふ、及び努力した結果として起こる満足の感、又若し努力しなかつた場合には之れに伴ふ不満足之感。

此の分析を見れば、児童の道徳的品性か如何ほど其の環象及び教育に影響するかを前よりは一層明らかにすることが出来るであらう。行爲の正邪に關する問題は自然界に關する如何なる問題も到底比較にならぬほどに高尚なるもので之れを解決するには如何なる場合に於いても自我のあらゆる活動の共力を要するのである。是れ、吾等が児童の生活に入り來たるあらゆる事物に對して先づそれが児童の徳性に如何なる影響を及ぼすかを吟味するを要する所以である。こゝまで述べれば、児童に行儀の眞精神、眞性質を明らかに理解させる必要のある理由は説明するまでもなくよくわかるであらう。若し氣高い精神が氣高い行儀に伴ふようになれば、是れ已に立派な徳性を具へたものである。若し然らずして二者相伴はずば、児童は唯だ單に其の眞性質を蔽ひかくして其の同胞を欺瞞する術を覺ゆるに過ぎない。

児童に於いて正しき動機が如何よ様に發現し、如何よ様に發達するか。是れ教育上大いに注意すべき微妙なる問題である。威力を加ふること必ずしも正しき動機を發達せしむる所以の道でない。がみく／＼叱責嘲罵することも殆んど効能が無かるべく、賞品を與ふこともさまでの力があるまい。又利益を示して導くは却つて児童の利己心を増長せしむる所以である。是等は児童の正しい動機を發達させる上に殆んど効力の無いものであるが、児童の行爲に對する稱讚の語は彼れを刺激して正しい行爲に出でしむることがある。また他人に對する敬愛の情は悪行を防止する有力なる禁制として役立つことがある。但し是等の中或るものは正しい動機を發達させる上に一時の効能はあらうけれども、いづれも道徳生活の精髓を養ひ得べきものではない。道徳生活の精髓とは一身の快樂、一身の利益、或るひは他人の利益に關係なく、唯だ、正義の爲めに、正義を爲さむとする動機に外ならぬ。

斯くいへばとて直ちに是等の動機は常に無價値有害だといふ意味に解釋されるはならぬ。児童の發達の段階によつて是等の動機は自己の利益を目的とする動機でも、悉く有益に用ゐらるゝ。例へば、児童の發達過程には身軀に關する動機

のみに重きを置いてそれ以外の動機の價値をば到底見得ざる時期がある。或るひは賞與が特に其の心を惹き、或るひは便利てふこと、獎勵の語、自分の敬愛する人に訴へ示さうといふ考などが特に其の心を動かす時期がある。或るひは一行爲が正しいといふことを確かめれば前後の辯へもなく直ぐにそれを實行する時期もある。而して保護者の常に留意すべきは其の期／＼の特質によりそれぞれ獎勵の法を異にして最後の目的地に誘致するところである。兒童の動機の發達に關しては左の簡單なる法則が少なからず實際教育に資するてあらう。

一、主として積極的動機即ち活動的動機を用ゐ、消極的即ち制限的動機をば成るべく用ゐるな。

二、兒童にわかる、即ち彼れに評價の出来る動機を示せ。

三、始終兒童の評價し得る限り最高の動機を示して、之れを實行するように獎勵せよ。

四、あらゆる機會を利用し、兒童をして次第に高尚なる動機を評價し得るようにならしめよ。

五、出来るだけ速かに自己的、私欲的の要素を棄却せしめよ。

六、成功を急ぐな。正善に赴く衝動が兒童の全存在を支配するようになるまでは警戒を怠るな。

斯かる趣意によつて兒童を養育教導するに就いては、不斷種々の問を發して、動機の發達する要狀を研究しなくてはならぬ。例へば兒童が何歳頃に長者の權威を關心せずに動作するようになるか、若ししかなるならば、春機發動期になれば兒童の容子及び徳性を如何様な變化が起こつて来るか、若し起こるならば、家庭の訓練が彼等に如何なる影響を及ぼすか。斯様な事を研究すると共に、又吾等の教育法及び吾等自身の行爲に就いて深く反省しなくてはならぬ。例へば吾等が正邪善惡の正しい標準を示して彼等に臨んで居るか、或るひは偏した杓子定規によつて壓制して居るか。兒童の爲す所が吾等の要めた所に合ひさへすればたとひ卑しい動機から出てもそれに満足するか、或るひは及ぶ限り種々の方法を施して益、高い道德的理想に導かうとして居るか。吾等は吾等の管理の下に在る子供が感じの鋭いのを喜び、面倒を厭はず始終同情を寄せて親切に勸告を與へて居

るか。吾等は始終兒童の爲す所に注意し高尚なる思想感情の萌芽が僅かでも現はるれば其の機を逸さず之れを養つて行くように勉めて居るか。吾等の行狀は兒童がそれを模範として高尚なる道德生活に入り得るほどに修まつて居るか。是等は吾等の常に怠らず反省すべきことである。

要するに禮儀といひ行儀といひ道德といひ其の最後最大の目的は正義の爲めに正義を行ふとにある。而して兒童を此の理想境に達せしむるに就いて最も肝要なることは彼等を己れを愛すると共に他人を愛するようにならしむること及び内心に思ふ所と言容に表はす所とが一致するようにならしむること、かくならしむるには先づ吾等の行ふ所を彼等の模範たるに堪ふるようにせねばならぬ。蓋し心理教育等に關する幾多の研究は其の歸著するところ畢竟兒童の徳性の涵養に在る。兒童を教育して自ら欺かざる君子たらしめむには先づ教育者自身之れを説くに愧ぢぬだけの徳器を具へねばならぬ。

第二十一章 常態と不常態と

常態 (normal) とは自然的なること、言ひ換へれば其の態様性質が同種類の大數のと同じきこと即ち模型に一致して居ることを意味する。故に常態の兒童といへば、生まれ落ちた時に完全なる身軀を具へて居る者、或るひは其の身心の發達が同じ年頃の通常の子供のと略同じき者といふ意味である。之れに反して若し其の形が不完全であるか、或るひは其の發達が並外れて早い、か又は遅い者をば之れを稱して不常態 (abnormal) といふ。即ち年齢の割合にツヌケテ伶俐なる子供と甚だしく遲鈍なる子供と、若しくは年齢に比して非常に大きい子供と格段に小さい子供とは共に不常態の兒童と稱さる。此の語は又怪我をして不具になつた者、或るひは身體機關の不自然に太り、或るひは小さくなつたものにも適用さる。故に常態、不常態とは畢竟人並、並外れといふことで、此の語を適切に用ゐるには先づ種々の態様性質を仔細に觀察せねばならぬ。

圖抜けて伶俐なる兒童をば通例「早熟」(precocious) と稱し並外れて遲鈍なる兒童

をば「不具」(defective)と稱する。此の二者は共に稀有の現象とさるゝもので學者多くは二者に對して「例外」といふ語を適用する。此の故に、六歳にして十歳なる普通の子供ほどに知慧のある者も、十歳になつて六歳なる普通の子供に劣る者も、同様に珍らしがられて學者の研究問題となるのである。さりながら、早熟者も不具者も決して世人の思ふように稀有のものではない。天下何處の學校へ行つても此の二種の例外者の無い學級は殆んど無からう。此處には記憶力は珍らしく強いが判定は全く出來ぬといふ子供がある。彼處には耳で聞いたことはよく記憶するが目で視たことは殆んど思ひ出せぬといふ子供がある。或るひは驚くべき數學の才を具へて居ても語學、文學にかけては初歩だも解し得ぬ者があり、或るひは文學美術に珍らしい才があつても數學、理學に關することは全く頭に入らぬ者がある。

兒童の中には身體の外觀が完全なるように見えても、其の感官或るひは内臟に輕からぬ缺點のある者が少なくない。尤も生まれ落ちた時に著るべき缺點のある者は少ないけれども、尙ほ世人が普通に想像するより遙かに多いのは事實である。

時には一家の兒童悉く身體に缺點があつて、兄は目が悪く、弟は耳が悪く、其の弟は耳目の兩方が悪く、姉は筋運動に申分があり、妹は腦其の他の機關に異狀があるといふような所もある。又、數人の子供の中一人だけ或る機官に缺點があつて其の他は皆完全だといふ家庭は澤山あるであらう。又、たま／＼は數代の間格別な身體上の缺點のある子供を見たことのない家もあらう。

身體の不具なる兒童の中には、其の不具が氣分の狂ひほどにしか見えぬものもある。従つて兒童を不具ならしむる原因は非常に微妙なるもので容易に知り難い。余が知れる限りの場合に就いていへば、兒童の不具が兩親からの遺傳に因由するものは甚だ少なく、遺傳の法則は之れに關して辯明するところが殆んど無いように見える。例へば、骨の發育の不完全、腦組織の發達休止、運動神經組織の痿痺、腕或るひは脚の痿縮乾瘦、或る特殊の感官の衰弱等は他の動物植物に於いて往々見るが如く、或る意外の若しくは偶然の原因から起こるように見える。尤も、麻疹、耳膜炎、紫斑病、腦膜炎、窒扶斯、百日咳、猩紅熱、瘰癧、疱疹及び其の他の病が原因となつて身體の不具になつたことの容易に見出ださるゝものも多くある。但し、斯様な

場合に於いては身體の不具が通例心的能力の缺損に伴はぬ。言ひ換ふれば身體が不具になるだけで之れと共に精神まで不具になることはめつたにない。研究の結果によれば脊椎彎曲、彎脚、鎌足（足尖を内側に曲げて歩く者）及び之れに類した不具は大抵幼時に於ける坐り方、立ち方、歩き方の悪習慣から來るといふことである。又是等の中には學校で備へ付けた腰掛の不完全なる爲めに起るものも少なくない。蓋し遺傳の虛弱は屢、身軀不具の遠因をなすことがあるけれども、適當なる注意を施せば之れを未現に防止することが出来る。

遺傳の疾病及び不具には種々の差別はあるが、要するに左の三原因の中の一つに歸する。謂ふところ三原因とは、(一)片親或るひは兩親に於ける同じ疾病若しくは不具、(二)片親或るひは兩親に於ける固有の虛弱、(三)片親或るひは兩親に於ける悪習慣、此の三つである。遺傳の法則が父母の弱點を間違ひなく容赦なく其の子に傳ふることに關しては無數の例が之れを證據立てゝ居る。若し此の法則が弱點のみを傳へて善美なる方面を傳へぬものならばそれは唯だゞ人を脅嚇するのみであらうが、幸にも此の法則は身軀の缺點を傳ふると共に其の優れた點をも傳

へ、又教育其の宜しきを得れば兒童をして遺傳にうち勝たしめるとも出来る。されば父母たる者が、若し己が身體の固有の傾向を意識し、健全學の示す所によつて正しく自分並びに兒童の身體を鍛へて行くならば、豫想した疾病若しくは缺點の現はるゝ心配の全く無いような強壯體になるとが出来るであらう。蓋し、父母のいづれかに固有若しくは慢性的疾病の在るのは、取りも直さず其の子に同じ疾病に罹り易い傾向のあることを示して居る。是れ吾等が、兒孫の爲めに一言一行一飲一食をも苟もすべからざる所以である。思ふに、此の研究が人をして遺傳法の恐るべきことを知らしめ、不良なる遺傳から兒童を脱せしむべき方法を考究せしむること以外に何等の貢献を爲し得ずとも、其の事だけで少なからず人類を益し得るに相違ない。茲に面白きは父母の體質が相反して居ると、往々にして其の子に中正を得た者の生まれ出づることである。蓋し兩極端相制していづれの一方にも偏せぬ者を出だすのであらう。此の相制し相正す傾向は極めて些細なる事の上にも現はるゝ。或る家に於いて、主人の鼻が右の方に曲り、其の妻の鼻は左の方に曲つて居た、然るに其の間に生まれた女兒の鼻は人並であつたといふ。是等は其

の卑近なる一例である。

茲に特に言はねばならぬのは父母の習慣及び職業が兒童に及ぼす影響である。父祖が音楽家であれば其の子の指は自然に樂器を奏するに適して居る、レース製造入の子は自然に其の父の手の筋の技巧を受け継ぐ、畫家の子供が筆を以て丹青を塗抹する様、彫刻家の子供が刀を以て木竹を切り刻む容子は、おのづから職業の異なる他の家の子供と違ふ。而して斯様に子孫に傳はるのは管だ父祖の職業技巧のみならず、其の習慣も亦皆同様に遺傳してゆくのである。嚴密にいへば、苟も人の活動力に影響する事物にして其の人の子孫に影響を及ぼさぬものは一つも無い。片親或るひは兩親の麻酔物を嗜む習慣が往々其の子の痛ましい不健康の原因となることはよく人の知つて居ることである。今日飲酒家喫煙家が其の家及び子孫に對して大責任のあることは特に統計に訴へて證明する必要が無いほどに明らかになつて來たといつてもよい。

單に視覚だけに就いて云つても、デンスモア氏 (Dr. F. H. Dismore) の調査したるところによれば、視覚不完全の兒童八十六人の中三十一人は飲酒家の子であつ

た。又喫煙家の子三百九十九人の中二百二十四人は眼が弱かつた。此の試験に供された兒童の中に其の子の生まるゝ當時に喫煙して居た老兵士の子が百五十六人あつたが、其中百十人は視覚不完全の者であつたといふことである。勿論其等の兒童が視覚不完全になつたについては父母の飲酒喫煙以外に種々の原因もあつたであらう、されども此の調査の結果は酒、煙草を嗜む世の父母たる人の注意を喚ぶ理由たるには十分である。タッグダル氏 (Dugdale) のデューク族 (Juke family) に關する統計表に、酒、煙草等を用ゐぬデューク十九人の中只だ一人が病氣に罹り、酒、煙草を嗜むデューク十三人の中十人は不健康であつたとある。英國の大書記タタム氏 (Dr. Tatham) は飲酒は死亡者の率の非常に多くなる主なる原因で、酒を好む者が酒商になればもう往生だといふて居る。又彼れは統計を以て世界で最も健康なる者は僧侶だといふことを示して居る。其の原因の、アルコールたると、煙草たると、鴉片たると、遊蕩たると、其の他の種類の不攝生たるとに論なく、父母に於ける身體上の墮落の結果がどんなか方法によつて子孫の身體に現はれて來ぬといふことは殆んど無い。時としては父母の墮落の結果が兒童成人の折まで、若しくは

中年まで現はれぬこともあるが、夙く搖籃の中に現はれ初めることも屢々ある。案ずるに、兒童が神經錯亂癩癲、癩癲、肺患、其の他之れに似よつた病氣に罹るのは、其の子が血統を引いた父祖の中に自然の法則を破つた者のあることを明らかに語つて居るのである。デロセフ、クック氏がオリブ、エンデル氏の言として引いて居ることに、エンデル氏が曾て或る人の充分早く醫師を呼びさへすれば如何なる病氣でも癒えると言つたのに答へて、如何にも尤もだが、其の充分早く(early enough)といふのは大抵の場合には二百年以前を意味するであらうといつた。奇怪なるようで而も道理ある言といはねばならぬ。又斯學の典據とさる、クラーク女史の言に、虚弱は腐敗生活の結果である、又往々罪の結果である、時としては其の家に累代道徳上の責任を自覺した人の出なかつた爲めに子孫相ついで不規律不節制なる生活を送つたとの結果である。兒童が生まれぬ中に感ずる激動、不意の出來事、或るひは疾病等の爲めに虚弱になることなくして、マンマと生まれ出た場合にも、其の祖先の中に飲酒、喫煙、喫鴉片、不徳なる生活、發狂、虚弱、犯罪等の不良なる習慣、或るひは出來事があつた爲め、若しくは其等が悉く具備した爲めに虚弱になること

が少なくないとある。虚弱なる兒童百人の中三十四人は實に節欲せぬ父母の間に生まれた子供である。

身體上の不具の遺傳は取りも直さず精神上の不具の遺傳を意味して居る、殊に身體上の不具が腦神經、或るひは感覺神經の疾病であつた場合には二者の關係が更に密である(運動神經の場合にすらも二者の間には矢張り密なる關係がある)。身體の不具と精神の不具との間には斯く密接なる關係あればこそ、醫師が怯懦なる者、或るひは發狂者を治療するに當つて先づ第一に其の身體上の錯亂を直さうとするのである。身體機關の諸能力が常態に復すれば精神上の均衡も亦之れと共に常態に復して來る。故にモーツリ氏(Maudsley)は、今日精神的疾病の治療に従事する者は一人として先づ身體機關の錯亂、殊に腦作用の錯亂を直さねばならぬことを疑はぬと云うて居る。又ウィッフェル氏(Wiefer)は、殊に兒童の精神錯亂は大抵身體の疾病に基因して居る。故に此の事を知つて適切なる治療を施せば大抵は癒ゆるけれども、若し此の關係を忘るれば不治の疾病が起こつて來るであらうといふた。

嚴密に常態を保つて居る心から甚だしく錯亂したる心に至るまでの段階は、神經組織の完全なる身體から腦活動の全く錯亂した身體に至るまでの段階と密に相對應して居る。蓋し常態といふ語は、通例完全に近い身體に適用さるゝと同じく、心の方面に於いても多少の缺點はあつても先づ人並なる大抵の心状態に適用さるゝのである。それ故吾等は、ほほらかに常態と稱する精神或るひは身體でもそれが嚴密なる意味に謂ふ常態から内にか外にか少しでも離れて居れば、其の離れて居るだけそれだけ虛弱疾病發狂等の病的状態に傾いて居るといふとを合點して居らねばならぬ。精神上の缺點を誘起する原因はさきに身體上の缺點を誘起するものとして掲げた原因と略同一である。さて心身の性癖の遺傳に關しては學者によつて其の説が同じからず、或るひは遺傳するものは如何なる場合に於いても身體上の傾向に限ると主張する者があり、或るひは精神上的の性癖も往々直接に遺傳すると主張する者もあるが、いづれにしても心の立派に活動し發育するか否かが身體機關の正確に容易に其の作用を營むか否かによつて定まることは疑ひない。若し感官に缺點があれば、其の必然の結果として外界を完全に知覺し

得ぬようになり、従つて心の發達が阻礙されざるを得ぬ。視學官クロック氏 (Klock) は、ヘレナ市の學校生徒を委しく調査した後、兒童の中八年乃至十二年の間規則正しく出席し而して六月乃至二年後れた者に就いて見るに、かゝる不結果を來たした原因は殆んど皆視官、聽官或るひは視聽の兩感官の不完全なるにあつたといふことを報告して居る。蓋し吾等の心は感官の供給する材料により、それを磨き上げて知識とするのである。即ち心の高尙なる活動は只だ其の低い活動が種々の材料を豊かに供給する時に於いてのみ正しく發達し得るのであるから、感覺に缺點ある者の精神が正しく發達し難いことはいふまでもない。

身體上の不具が精神上の不具であるのみならず、身體及び精神の不具は概して道德上の不具である。但し茲に道德上の不具といふは必ずしも能動的に惡事を爲すといふ意味ではなく、其の中には單に善事をも惡事をも爲さうといふ動機のない者、或るひは無意にして道德的活動に出づる者をも含めたのである。道德的に不具なる兒童に左の四種類ある。

第一種、其の性が所動的で、進んで人に害を加ふることはないが、氣力が薄弱で

グウタラで、如何なる欲望に對しても熱心に力を注ぐことの出来ぬ者。

第二種、善に傾いては居るが意志の力が弱くして誘惑され易い者。

第三種、執拗で、悪性で、残忍で、感覺的情慾が強くて、而して知力の鈍い者。

第四種、智力は鋭敏だが、狡猾で、不正直で、竊盗心、詐欺心のある者。

右に挙げた各種の道德上の不具者が悉く一教室の中に見出ださるゝとが往々ある。また或る特殊の地方に於いては學校兒童の中に是等の道德的不具者が危険なほど澤山居る所がある。従つて、彼等を如何に管理し教化すべきかが教育家を悩ます重大なる問題となることがある。道德的不具者を教化するには、先づ其の缺點の由つて來たれる原因を知ることが肝腎である。

病理學者も犯罪學者も、道德的氣質が身體及び智力の方面と同様に遺傳の法則に支配さるゝと説く點に於いて概ね一致して居る。さきに掲げたチーク族に關する信すべき統計を見れば此の説の確かなるとが益、明らかになるであらう。デューク族と稱せらるゝ一族の先祖は獵師で漁夫で大酒家で、氣輕で、人懐こくて、熱心に労働を續けることが嫌ひで、折々思ひ出した様に無關に働くが又直ぐに懶ける

性で、老後に盲目となつて其の盲目を子孫まで傳へた者であるが、此の一人の子孫が一百五十年の間に一百四十人の犯罪者(其の中に七人の殺人罪の犯人を含んで居る)を出した。而も此の計算の中には官の救助に生活する極貧者、娼妓、破落漢、醉漢、摘發されぬ小盜、詐欺師、騙兒等の數を記した長い表を省いて居るのである。リボト氏(Ribot)が秘密に酒を用ゐた教育ある人に就いて語る所によれば其の人の子五人の中四人は夭折して成年まで存命へたは只だの一人、而して其の一人は生まれながら残忍で非常に動物を苦しめるとを好み出来るだけの方法を案出して無辜の動物を屠殺した。彼れは心身次第に衰弱して十九歳の時癲狂院に送られたといふことである。モレル氏(Morel)は或る地方の子供十歳より十七歳に至る間の百五十人を調査して曰ふには、予は此の調査によりアルコール飲用の有害なる結果に關して深くわが從來の確信を強めた。アルコールは管だ之れを過度に用ゐる個人に大害を及ぼすのみならず其の子孫にまでも容易ならぬ害毒を流すものである。飲酒家の氣拔けした相貌に於いて實に身體上の墮落、知力上の墮落及び道德上の墮落といふ三個の極印が捺されて居る。

或る種類の不道德的本能が遺傳することも亦争はれぬ事實である。例へば、或る家族に於いては虚言の癖が遺傳し、或る家族に於いては家畜を盗む性質が傳はり、又他の家族に於いては殺人、強盜、巾著切、喧嘩、放火、不正直、賈造、遊蕩等の惡癖が遺傳する。世に泥棒血統、虚言吐血統などいふ語のあるのも無理でない。或る新聞紙の傳ふる所によれば、此の頃音に聞こえた一人の家畜盜賊が死刑に處せられたが其の者の家族數人はいづれも家畜盜の犯罪によつて獄裏に宣告を待ちつゝあるといふことである。

さりながら兒童の初年の生活に著大なる影響を及ぼし其の徳性を腐敗せしむるものは決してただ遺傳のみではない、四圍の現象は何氣無き體を装ひながら常に隙を狙うて子供の心の裡に毒息を吹き込ませうとして居るのである。風通しの悪い家に年中酒の香を嗅ぎ、非倫悖徳なる父母の野卑猥褻なる言葉を耳にし口穢く、手癖が悪く、始終惡事を巧んで居る仲間と交つて、えらくなるには虚言吐くと盗むと喧嘩することを稽古せねばならぬと教はつて居る子供が道德上の不具者となるに何の不思議があらうぞ。其の怪しげな遺傳的傾向の薪に加ふるに此

くの如き言語同斷なる現象及び訓練の油を以てして猶ほ温良正直なる子供が養成さるゝならば、それこそ寧ろ驚くべき現象ではないか。かゝる亂脈な家庭から春風和煦の理想的爐邊に至る迄の間には高尚な道德的品性を築き成すに必要な要素を缺いた無數の不完全なる家庭が在る。それ環象は譬へば兒童の心身を養ひ成す所の空氣である、立派な遺傳を以て生まれた兒童として斯かる現象の中に入る以上は如何にして其の惡臭に染まらずに居られようぞ。

吾等が斯く多言を費やして虚弱不具の兒童が出づる所以の原因を説明したのは、心ある人の注意を喚起して是等の惘れむべき不幸者に關し更に精密なる研究を爲さしめむが爲めである。世の父母教師たる者は概ね其の子供に是等の根本的缺點のあるとを知らず漫りに叱責嘲罵して、苛酷なる方法が其の缺點を矯正し得ぬのみか寧ろ之れを助長する傾きのあるとに心づかぬ。彼等は幼兒に於ける極めて些細なる病的傾向も、注意して矯正しなければ、其の成人した曉に心身の破壊を來たすべきことを悟らぬ。前にも言うた通り立派に並行して居るように見える二つの直線も、其の初めに於いて一厘一毛の歪みがあれば、一里二里と進んだ

後には幾尺幾間の歪みを生ずるようになる。些細なる悪性癩の増長するものもこれに異ならぬ。故に兒童の保護教養の任に當たる者は兒童の身體上、精神上、道徳上の特性を詳しく合點し、各自の特性に應じて教養の方法を講ずることが肝腎である。人並の兒童は今日已に多過ぎる程の注意を受けて居る、さりながら例外即ち人並以上及び以下の兒童は、まださまで注意されぬ。蓋し吾等は是れまで兒童個性の要求に適應した教育を施さうとは力めずしてむしろ團體として劃一的教育を施し、強ひて或る一様の理想に達せしめむとして無駄骨を折つて居たのである。兒童の個人的性癖を突き留めて應病與藥的教育を施すことは今後吾等の大いに著目すべきところ、父母教師の無智無見識は決して看過すべからざることである。

教師の中には兒童に對して無理な處置をした後に、偶然、止むを得ぬ事情のあつたことを發見してハット思ふた經驗のある人が澤山あるであらう。小學教育に従事したる一友人が曾て余に話したことがある。一日、其の友人が兒童に向かつて一の原理を説明した時、一人の女生徒が解し兼ねて繰り返して説明せむことを

請うた。彼れは長い間幾度となく説き明かして後、モウすツかり解つたらうとたづねて見ると、まだ解りませんといふ。彼れは我慢がしきれなくなつて遂に、これだけ教へたら白痴でも解りそうなものといふと、女生徒は忽ち雙眼に一パイ涙を浮かべたが他の生徒が悉く退いて後も猶ほ其の椅子にうち伏して啜り泣いて居る。教師も之れを見て氣の毒になり、辭を和らげて何故にさまで深く感じたかを問うた。女生徒が咽びながらの答がこれである。「先生！私のお母さんは只今瘋癲病院に入つて居ります。そして其の子の私共は始終お母さんの様に其の病院に行きたくないと心配して居ります。私は先刻先生の仰しやつたのは眞實の事で、私はもう白痴になつて居るのではないかと思ひました。此の教師は其の後多年教育に従事したが、此の女生徒の一語を聽いてから、二度と生徒に對して荒しい取り扱ひをしたことがないといふた。

數年前のこと、一人の教師が階子段の處で一人の女生徒のぐつ／＼して進まぬのに氣を焦燥して遂に其の首筋を捉らへ烈しく振つて、サア進めと命令したことがあつた。然るに後に聞けば、此の女兒は脊椎病を患へて久しく治療中であつたが

其の學年の初めに、兩親が學校に行く位は差支なからうと認めて登校を許したること、而して其の女兒の遲疑したのは全く其の病氣の爲め、又其の病氣の再發しそうなことは決して爲まいといふ用心の爲めであつたのである。其の子が家に歸つてから其の家庭にどのような心配な相談が起つたであらうか。余は曾て綴字の時間に生徒をして互に他人の綴つた文字を批評し、誤綴ツボミに印をつけさせたことがある。其の時一人の生徒が自分の正しく綴つた三個の文字に誤綴の印をつけた者のあるとを訴へ出た。そこで翌日生徒等に向かつて自分の批評したと、誤綴の印をつけたとに就いては各責任を負はねばならぬと教へた所が、業が濟むと前日他人の正しい綴字に誤綴の印をつけた女の子が余の前に進み來たつて白狀した。余はどうして其の様などをしたかと尋ねたが其の女兒は、私の目が！私の目が間違つてさう認めたと思ひますと答ふるばかりである。それから試験を行つた結果、視覺に異狀あることが明らかになり、其の言うたことは實際正しくして其の兒の今まで行つた間違が概ね其の必然の結果であつたことがわかつた。余は又曾て一少女を嚴しく叱責したことがある。其の少女は幾度諭しても

聞き分けがなく又幾たびとなく同じ過ちを繰り返す。余が之れに向かつて其の不心得を責めると平氣で微笑し居り、さう聞き分けが無いなら停學を命ずべきぞと嚇せば我が顔を見て冷笑して居る。余は餘りの不思議さに、何故わが眞面目の訓戒をさう輕々しく受けるかと詰ると、其の少女は答へて、私は心に泣かうと思つても何故か自然に笑が催し、笑はうと思ふ時にも我れ知らず泣けて來ますといふ。余は之れを聞いて其の少女を赦し、それから別な方面より其の少女の研究に取り掛かつたが、後一友人が其の少女に關して書き送つた中に、彼の少女は幼い時から癲癇病を患へて居たのである。此の一兩年は經過が非常に宜しくして殆んど全快したようになり、去年の夏は醫師も其の兩親に請け合つて、しばらく他人の間に立ち交はらせよ、さすれば新境遇の刺激によつてやがて通常の健康體となり自在に身體の支配が出来るようになるであらうと云つた。笑と泣との齟齬について少女の語つた所は事實である、蓋し其の笑ふ時に働く筋と泣く時に働く筋とが一緒に結ばれて居るのであらう。癲癇病者が知力上、道德上尋常の發達を遂げるといふことは殆んど望むべからざることである。

曾て、恐ろしく骨折つて善い人にならうと努めた小兒が其の教師にいうたことがある。善人になることは先生には容易いこととせず、先生のお父さんは牧師さんですもの。しかし私のお父さんは悪人で、酒を飲んで、悪口を言つて、博奕を打つて居りました。私は折々丁度お父さんが爲した通りの外することが出来ぬと感じます。又或る黒人の女兒が其の懐いて居る貴婦人に向かつて、わが同族の人だちがうち揃うて殘忍なのを見ると私も立派な人間になられるか、ならぬか、氣遣はれますといつたといふ。斯様な類ひの子供は實に到る處の學校に居るのである。而も世人は往々遺傳説を嘲つて病的、神經的なる學説といふてはないか。吾等の前途や實に遼遠、責任や實に重大なりといはねばならぬ。

不常態の兒童の中には上に挙げた種類の外いろ／＼の事情によつて發達の遅れる者が澤山ある。同じ父母から生まれた兄弟でも、伶俐で活潑なる子供は懶惰なる者に比して遙かに發達し易く又進歩すべき機會を澤山有する。又茲に温順しい内氣な子供と活潑氣鋭の子供とあらば、其の性質は已に二者の心的發達の遲速を豫示して居るといふことが出来る、何となれば前者は他の誘導刺激を受けねば

自分の行くべき道にさへ進み得ぬのに後者は大膽に自ら道を切り開いて進む、前者は自分に必要な經驗を得ることさへもなさぬがちであるのに後者は必要以上の經驗さへも得ようとし又屢、得るとがある。例へば、或る兒童は自ら勇んで學校に行くのに、他の兒童は學校に行くのを嫌ひ家に居て下らぬ陰氣な遊びに耽つて居るといふ差別があらば、前者が歩一步向上の態度勇ましく進むに當つて後者が落第又落第、折々永續せぬ似而非奮發を試みた後遂に學校を退くに至るは初めより定まつた數といはねばならぬ。此の一章は他の幸福なる同胞に比べて其の首途の思はしからぬ兒童即ち不具不肖不完全不健康なる兒童の爲めに特に述べたのである。但し、不常態の兒童というても其の中には世に稀れなる傑物も居らう、さりながら、其の遺傳才能の如何に拘はらず、吾等は之れに深き同情と獎勵とを與へて少なくとも人並の幸福な兒童と同様の生活を送り得る様に教育すべき義務を負うて居る。また一人種一種族の不常態的傾向は先づ其の人種種族中の個人の心身を健全にし完全にし、強くするによつて漸次に矯正せねばならぬ。

前の諸章に指示した研究法は凡べて多少此の問題を研究する手引にならうが

尙ほ特に此の問題に關係あるものを少しばかり加へよう。先づ第一に各兒童特殊の傾向性癖に注意し其の原因を求めよ。一兒童が若し活潑ならば其の活潑なるに目的があるか、或るひは目的が無くして只だ漫然跳ね廻はる活潑なるかを研究せよ。又多感性であるか、氣鬱性であるか、容易に微細なる點に注意するか、辯舌が非常に達者でも何一つ確實に知つて居ることが無いか、頻りに勤勉工夫して居るように見えても課せられた仕事を爲す上に於いて少しも進歩せぬか、理想を缺いて居りはせぬか、定まつた動機がなく漫然事を行ふ傾きはないか、下らぬ小事に興味を有するか、或るひは重要な事に興味を有するか、其の頭の形が腦の活動力の弱いことを示しては居らぬか、其の顔が其の心の狡猾なることを示しては居らぬか、其口と唇とが其の野卑にして肉慾的なることを示しては居らぬか、引ッ込み魂性ではないか、執拗ではないか、失望落膽する癖は無いか、血氣に早りはせぬか、忍耐力があるか、落ち付いて居るか、移り氣する傾きは無いか、其言語或るひは筋支配に缺點は無いか、自己の缺點を意識して居るか、學友等が其見の迷惑を増すような取り扱ひをせぬか。是等は此の章の題目に關して特に注意すべき事柄である。

不具なる兒童に幾時間の業を課すべきかといふことは屢、起こる疑問である。之れに對する答は生徒全體の要する時間によつて定むべしといふ外に仕方がない。少數の利益の爲めに全體の利益を犠牲に供してはならぬ、遲鈍な子供が了解する迄伶俐な子供を待たして置いてはならぬ。絶對的劃一は到底出來得べからざることも、又望ましいことでも無い。若し其の教授に可なりの時間勞力を費やしても到底理解し得る見込みの無い場合には、之れを或る個人に委ねて特別の教育を施すか、或るひは甚だしき缺點ある兒童の爲めに特に設けた學校に送るが當然である。斯くいへばとて兒童研究をば造化の寵兒を蔑ろにするものと心得てはならぬ。兒童研究の本領は深く各兒童の性能を知り、其の個性に應じて之れを正しく發達せしむべき最も完全迅速なる道を研究し、父母教師をして之れによれば各種類の兒童をそれぞれ適切に教育し得ること疑ひを容れぬといふ方法を知らしむるにある。

第二十二章 生長の段階、疲勞點等

最後に、此の章に於いて兒童の生長・健康等の問題に關して極めて簡單に述べようと思ふ。

嬰兒、幼年及び少年 (infancy, childhood, youth) — 兒童は此の三段階を経て大人になるのである。此の三段階に於ける知的生活の主要なる特色をいへば、第一なる嬰兒期に於いて主に働くは感官上の知覺 (sense-perception) 第二なる幼年期に於いて活潑に働くは記憶と想像と、第三期なる少年期に於いて盛んになるのは思考と推理とである。嬰兒期は他人に依頼する段階で特別の關係ある人の同情ある監督を要する故に、家庭の中で此の期を送ることになつて居る。幼年期とは通例五歳から十二歳までの間を指していふ。此の期の初めに至れば兒童は漸く發達して家庭を離れ家人の監督を離れて他の兒童と雜り遊び得るようになり、自分で自身の始末が一通り出来るようになり、又學校に送られても大丈夫なるほどの自制力が具はつて來るのが通例である。少年期は十二歳頃即ち春機發動期と共に始まる。

此の期に至れば、まだ他人の束縛は受けて居るものの、其の獨立心と斷えず活動せむとする傾向とは前の二期に比べて一層強くなつて來る。此の期は身體に根本的變化の起る時代で、其の變化は新たななる衝動を誘起し、而して其の新衝動は兒童の嗜好傾向を一變せしめ、又往々、不敬不注意私欲不從順等の惡徳を甚だしく増長せしむる。故に小學校に於いて管理の最も困難なるは十一歳から十四歳までの兒童の居る級である。

三期の兒童を仔細に觀察すれば、上に擧げたことの外に、尙ほ各期に特殊なる種々の性質のあることがわかる。兒童が家庭を離れて學校に入つた時に新たな周囲の事情に自身を適合させようとして、める趣などは、頗る面白く又爲めになる研究である。此の時は兒童生活中の危険なる時期の一つで、其の間の推移變遷に對しては深く留意せねばならぬ。多くの場合には春機發動期の近づいたことをば、其の身軀變化の上に明らかに現はるゝ前に精神上の變化を見て發見することが出る。少年期に至れば、嬰兒期・少年期の性癖が目立って強く著るくなり、其の性格が一層はつきりと定まつて來る。此の時期には又精神力の上にも屢々驚くべ

き變化が起こつて来る。例へば記憶力の鈍かつた子供が俄かに強記の人となり、幼年期に知覺の遲鈍であつた者が忽ち鋭敏に事物を辨別し得るようになり、想像に富んで居た者が冷靜無頓着になり、快活であつた者がうつて變はつた陰鬱性になるなどは此の期の子供に屢、見る所である。若し此の推移が穩健自然であれば嬰兒期及び幼年期に與へられた注意深き教育訓練は直ちに其の結果を現はし初め、其の判定力は益、鋭くなり、道德的概念は益、明瞭になり、意志はよく權衡を保つて働くようになるに違ひない。但し、兒童の生活に於ける件の三階段は茲に説いた様に精密に年代を劃することは出来ぬけれども、父母教師に兒童の生活に於ける危險なる時代が何時かといふことを理解させ、各段階に適應した教育法を合點し、よく必要のあることを示すにはさまで不足なき區劃であらうと思ふ。

兒童の理想と動機とは斷えず變化するものである、故に始終之れに應じて指導管理の方法を變へて行かねばならぬ。少年の中には其の眞意が父親に理解されぬ爲めに理由なく遠ざけらるゝ者が往々ある。蓋し、父親は其の子を何時迄も子供視して彼れが已に發達して大人になつたと、自ら事理を思考し推理し判定して

自己獨立の意見を立て、居ること、従つて其の意見選擇は宜しく道理を以て聽か
るべきことに心づかぬ。それ故親子の間が自然に離隔して、兒童が家庭に於いて
拒まれた同情贊助を世間に向かつて求めるようになるのである。

少年期に於いては懲罰によつて兒童を導いてゆかねばならぬ。さりながら無
分別に罰を行ふは無分別に藥を用ゐるよりも尙ほ惡い。兒童が惡い事をして
たから其の報いとして罰を加へてやるといふ思想、即ち報償を懲罰の主要なる目
的とする古代の思想は不合理なるのみならず又殘忍である。斯様な殘忍不合理
なる思想に基づいて罰を行ふ以上はどうしても兒童の心の底に惡感を留むるこ
とを免れぬ。一般の場合についていへば、罰は兒童をして速かに正邪を辨別せし
め誘惑にうち勝たしめむが爲めに行ふべきものである。兒童の過失は正義を爲
さうといふ意志の無い爲めよりも寧ろ正義を認め得ぬ爲めに起ることが多い。
彼等は今正不正の何たるかを教はつて居る最中である、彼等の性格は將さに形を
成さむとして居るのである。故に父母教師たる者は、教訓指導の積極的方法によ
ると懲罰の消極的方法によるにかゝはらず、常に弱者をいたはり助ける精神を

以て兒童に對せねばならぬ。罰は矯正の方便としては唯だ一時の目的に役立つのみ、兒童の人格を造り成すことに於いて偉大なる又永久に効力あるものは、已に前々章行儀と道德との條下に述べた通り懲罰ではなくして同情と忠言とである。兒童が罰を加ふる父母教師に漸々離反するのは、是れまさしく罰が自分を非難して居るのではないか。如何なる場合に罰を加ふる必要があるか、如何なる場合に罰を加ふる外他に矯正の途が無いか、如何なる種類の罰が適當有効であるか、是等を詳しく知って懲罰の法其の宜しきを得る者は、個々の兒童に親しんで其の性情に委しく通じた者の外に無い。氣質體質兩性發達の程度、家庭生活、在來の教育動機等の差異に關しては如何なる場合に於いても注意を怠ってはならぬ。世には不幸にして煩瑣なる規則を設け兒童が之れが犯すに従つてしきりに之れを罰すると云ふ傾向がある。近來の報告によれば、今の兒童教育者が兒童の一寸した轉意或るひは禮儀に合はぬといふ程の過失に向かつて設けた罰の個條が基督教の十誡中の重い戒律を破つた者に對する罰の五倍して居る。驚くべきことではないか。元來兒童は一般世人の想像するよりは遙かに道理の解つて居る者であ

る。世の父母教師たる者常に此の事を心に體して居るならば左迄困難せずに対応の問題を解釋することが出来るであらう。

疲勞點 (fatigue point) は兒童研究中に於ける一の有益なる題目である。此の事に關しては已に前章、視官を説いた際に一寸説き及んだことがある。吾等が若し薄色の物の面に書いた小さい赤色の點を暫らく見詰め、さて後に白色の面の上面を移さば前の赤色の點と同じ形同じ大いさなる綠色の點を見るであらう。斯様な現象の起るのは他ではない、吾等が熱心に赤色の點を見詰めて居ると神経細胞の赤色を認める活力は段々疲れて減つて來るが、其の間其の補色たる緑を見る活力は少しも働かぬ。斯くて赤を見る活力は疲るゝに従つて次第に減じ、休んで居た緑を見る活力は機を得て活動しようとして居る際に、忽然眼を赤色の物より離して白色の面に移すのであるから、待ち兼ねた緑を見る活力が躍如として活動を始め、茲に赤色の代はりに綠色を現出するのである。時計のチック、チックと規則正しく響くのが後にチック、タックと聞こゆるようになるのは、聽神経細胞のチックを聽く力が疲れてそれに近いタックを聽く新手の力が働くからである。同じ物を

澤山食ふと味がわからぬようになり或るひは異なる味のして來るのも味神經細胞に於ける同一の作用によるのである。料理の名人や味感の發達した人が、珍味は其の前を驅けて通つた位にホンの少し食ふのが一番旨い、多く食ふと却つて味を消すといふのも、其の理の一面は味官が此の法則に支配されるゝからであらう。此の疲勞の法則は身體の各機關を支配するもので、筋及び腦脊髓の全系統も悉く此の法則の支配を受けて居るのである。休息と睡眠とが兒童の健康發達に必要なるは運動が必要なると同様である。嬰兒期に於いては睡り過ぎるといふとがあるか否か疑はしい、否此の期に多過ぎるほど眠る者はめつたに無い。蓋し、休息と睡眠とには兒童の疲勞倦厭を癒やすといふよりは更に高尚なる目的がある。疲勞、倦厭は唯だ造化が之れによつて働者の力が已に盡きて其の身體組織がもとの様に再建され恢復されねばならぬことを示す符號である。兒童を管理するに當つて疲勞の法則を看過するものは無情なる仕事師といふべき者で眞の教育家といふことは出來ぬ。

疲勞は兒童によつては慢性的に長引くのがあるように見える。世には往々兒

童又は大人に關して、彼れは生まれながら疲れ果てゝ居るといふことがある。斯様な人は普通人に比して甚だ不精懶惰になり易く、而して其の不精懶惰には遺傳したのもあれば全く遺傳に關係の無いものもある。さりながらよく研究して見ると、數多の兒童の中には虛弱なる體質、肺患、心臟病、神經衰弱、活力の缺乏、過度の勞働の繼續、滋養の缺乏、運動の缺乏、或るひは、悲哀等によるもので眞に慢性的疲勞 (chronic weariness) と稱すべきものがある。凡そ斯様な事情のあつた場合には、其の兒童に對して特に親切なる取扱を爲さねばならぬ、しかしながら之れにかゝづらふ餘り健全なる兒童をおろそかにしてはならぬ。蓋し不健全なる子供を健全強壯ならしむるは必ずしも健全なる子供に其の健康状態を持續せしむるより大切なることではない。或る兒童は自然に他の兒童よりも早く疲れる。故にあらゆる兒童をして同一の時間に同一の仕事をしてはならぬ。それは丁度あらゆる人に同じ重さの物を擡げしめると同じこととて到底不可能の事、又爲してはならぬことである。出來上がつた仕事は丁度之れを爲すに幾何の力を用ゐたかを表はす。凡べての人が同一の仕事をしてはならぬといふのは畢竟或る者は極度

の勞力を出さねばならず或る者は其の力量以内に働かねばならぬといふことを意味して居る。天下斯かる沒常識の事は無い。要するに兒童は過勞にならぬ範圍にて爲し得ること及び一日と働き行いて次第に其の力を増し得ること以上の仕事を爲すことを要求さるべき者でない言ひ換へれば兒童には疲れ過ぎぬ加減に仕事をさせねばならず又毎日續けて働いて次第に發達し得る餘地のあるほどに働かせねばならぬのである。兒童が過度に疲勞するのは取りも取さず其の仕事が其の兒に重過ぎたこと或るひは長く續き過ぎたことを意味する。時々

の休息と仕事の變化とは如何なる兒童にも極めて大切なることである。但し兒童に課する仕事の身體上のものたると精神上のものたるとはさまで關するところでない。腦も身體の他の部分と同様に疲れるのみならず通例腦を使ふ仕事は身軀の他の部分を使ふ仕事よりは遙かに多く人を疲れさせる。統計の示す所によれば疲勞の法則を無視した時間割によつた教育は殆んど徒勞に歸するといふ。クローン氏(Dr. W. O. Krohn)は四萬人の兒童に就いて一日の中の何時頃に記憶の把住力が最も強いかを試験した。氏が此の試験によつて發見した所

によれば科目の順序を定めずに試験した場合には一日の最初の時間には生徒の平均把住力が百分の八十九、午前の最終の時間には百分の六十三、午後の最初の時間には百分の七十五、最後の時間には百分の七十七である。此の試験は結局兒童の記憶が朝の最初の時間には其の最後の時間に於いてよりも百分の二十六だけ強いといふことを示して居る。右の試験は科目の順序を定めずに行つたのであるが、今度は科目の順序を定めて第一時讀方、第二時文法、第三時數學、第四時地理、第五時歴史といふ時間割にすると、各の科目に於ける平均把住力の割合が百分の八十九、五十八、六十八、七十六といふ順序になる。又數學、理學、初歩讀方、圖畫、地理、歴史といふ順序にすれば平均把住力の割合が八十九、七十九、八十二、八十六といふ順序になる。而して此の最初の順序によれば運任せの漫然たる方法に比して通常の生徒の記憶力を利し得ることが、三時間目には平均百分の十六、四時間目には百分の七、而して一日の最後の時間には百分の九である。約めていへば合理的に科目を排列すれば、一日に百分の十乃至十二だけ兒童の記憶を増加し得るので、更にあし擴めていふと、此の方法だけによつて、兒童の學校生活十ヶ年の間に滿一ヶ年を

利することが出来るのである。他の研究者が確實及び注意に關して行つた試験（其の試験は狭い範圍で行つたものではあるけれども）もクローン氏の記憶試験のと殆んど同一の結果を示して居る。尤も是等の試験の材料の中には少なからぬ誤謬も入り込んで居るであらうけれども是等の統計が父母教師に見童教育上の指針を與ふるに足るとは疑ひない。又、學科排列問題は、勿論記憶試験だけによつて解決さるべきではない。若し心ある人が最も大切なる學科（だけでもよいから）に關し他の方面から研究してそれを教授するに適當なる時間を定めるならば其の兒童教育に資すること決して少なくはないであらう。

美的本能を忘れたる兒童研究は不完全なる兒童研究である。兒童の美的本能は主として技術の上に現はるゝが技術は感知すべき形象に表現さるゝに及んで始めて技術たるの實が擧がるもので、適切にいへば技術即ち表現である。技術の中其の形象の美なるものは詩歌、音樂、建築、彫刻、繪畫等である。是等の美術は其の幼稚なる段階に於いては概ね實用を目的として出來たもの、良い分て通常の思想（即ち特に美術的と稱するに足らぬ思想）に形象を與へたものたるに止まるが、人類

が森羅萬象に接觸する間に段々自然界の美はしい形象に刺激されて之れを摸倣しようとする衝動が起こり、之れと共に美的鑑賞力が徐々に發達してそれが一代一代に精緻高尚になつて來るのである。兒童が圖畫を學ぶに當つても矢張り此の様な風にして初まり、此の様な風にして進歩する。兒童の初めに書く畫は吾等が見てこそ（即ち吾等の思想に較べて見てこそ）御粗末極まつたものであるが、それは彼れの思想を現はしたもので彼れから見れば完全なるものである。其の畫が彼れに對して其の思想を表示して居る間は一種の神祕なる意味を有つて居る。試みに子供等に一つの物語を讀み聽かせ各自の最も深く感じた所を畫に表はさしめよ。而して其の畫を集めて研究すれば其の物語の如何なる點が最も深く兒童を感じさせたかを知り得べく、又彼等をして畫題を選択せしめるものが美的活動ではなくして寧ろ知的活動なること、言ひ換へれば美的價值のある畫題を選ばずして知的價值ある畫題を選ぶことが發見さるゝであらう。吾等は又其の畫によつて彼等が將來如何なる種類の美術を好むようになるかを豫察することが出来る。又、多數兒童の美感は先づ音樂歌謠に喚び起こされ餘程後れて色彩形狀の

美を味はふようになるように見える。

智識と経験との調和之れを稱して真理といひ、理想となつた真理と具象的形象との調和之れを稱して美といひ、真理と行爲との調和之れを稱して正義といふ。美は真理、正義の二者と密に關係して居る故に、美的修養は知識上及び道德上の優者となるには極めて大切なるものである。兒童に適當なる教育を施せば彼等は次第に劣等なる感官(例へば觸味等)に屬する快樂を斥けて高等なる感官(例へば視聽等)に屬する快樂を悦ぶようになり、更に進んでは感官上の快樂よりも知力上の快樂を貴ぶようになるであらう。而してかくならしむるには兒童をして美術に接せしむることが肝要である。蓋し美術は、概ね直接に視官及び聽官に訴ふるとはいふものから、兒童の性質中の美はしい本能を發達せしむるには有力なる要素である。美術は想像を刺激して人間のあらゆる高尚なる活動の發達を促すものである。此の理由があるが故に、兒童を教育するには、常に自然美及び人工美に接せしめ、其の感孚によつて自然に高尚なる嗜好が發達するようにせねばならぬ。例へば其の住む家は簡素なりとも屋の内外共に建築上一つの模範たり得るように

室内に備へ付けたる道具は質樸なりとも其の意匠排列共に高尚な嗜好に合つて居るように、庭園は狭くとも灌木喬木を程よく植ゑ並めて色彩いろ／＼なる草花を其の間に點綴するようにするとが肝要である。かばかりの住居を營むには、何等の趣構も無い箱同様なる世間普通の家屋を造るに比べてさまで多くの費用を要するとはないが、而もそれには教育上實に量り知られぬ價值がある。此の他に書棚、床壁には(たとひ少なくとも)美はしい高尚な書籍、畫幅、置物等を飾り、之れに加へて一家に言ふに言はれぬ光澤をつける母親の温かい情があらば、先づ兒童を教育するに適した理想の家庭が出來上がったというて可い。兒童の美感を養成するに必要な是等の備付は家庭に於いて望ましいと同様に學校に於いても缺くべからざるものである。而して兒童の美感を養成するに與つて力ある要素は悉く彼等を立派な人物たらしむる所以のものである。ワシントン市の視學官パウエル氏 (Powell) は同市の小學校に圖書、彫塑、圖案等の技術科を入れて以來、惡家庭の外觀上道德上大いに改善されたのが澤山あるというて居る。蓋し美術上の教育を受けた兒童は其の手に顔料、油土を持ちて兩親の教師となり、獸檻同様の亂脈な

る家庭を美はしく作り變へるのである。而して身體と精神との間には互に強めあひ美はしくしあふ關係があるから一旦形狀言語の美を認めるようになれば、それから思想動作の美に進み入るのは左迄困難などではない。故に、少しでも外形を美はしくするは取りも直さずそれだけ其の精神を美はしくする所以である。無意識或るひは半意識の裡に受ける影響が見童の嗜好、性格を形成するに與つて力あることも亦決して意識的に彼れの生活に入り來たるものに劣らぬ。例へば、見童を圍繞する空氣の如きは其の身體の各纖維に滲み込んで、ついに終生全く抜くべからざる調子、性癖を其の心身に與ふる。ワルドシタイン氏(Waldstein)が言うたことがある。文明諸國が教育上必要とする所は殆んど皆同一である。また小學校及び中學校の設立された處に於いては意識的自我も大概同一である。されども半意識的自我は非常に違ふ。蓋し半意識的自我は周圍風俗、習慣、言語、國民的模型、氣候、風土等から半意識の裡に受くる影響によつて造り成さるゝもので、それが嬰兒期、幼年期の兒童に影響して其の根本我を形づくるや其の影響の甚だ強く而も影響の仕方が微妙なる所から實際此の半意識的影響の結果として現はれた

ものが往々にして遺傳と認めらるゝことがある。意識的摸倣は常に教育の一大要素に數へられるが、無意識的摸倣も亦教育上決して輕視すべきものでない。幼時に於いては無意識的摸倣が終始働いて見童を、不斷接近して居る人に似させるものである。又無意識的摸倣は曾だ子供に影響を及ぼすのみでなく大人と雖も容易に其の影響を免れ得ぬ。余は人と成りて後音聲の良くない人と一月ばかり一緒に旅行したことがある。而して家に歸ると意外にも余の音聲がいつしか亂れて其の人のに似て來たのに氣がついた。それから頻りに直さうと努めたが年餘を経て漸く其の訛を脱することが出來た。米國の或る大學に名高い教授で少しばかり吃る人が居る、其の父が吃であつた、而して其の五人の子供も亦うち揃うて吃である。尤も斯様なことには別に身體上の理由があらうとは見えぬ。思ふに是れは全く半意識的摸倣によるのであらう。曾て米國に評判の高い英語教師の一人が、余は生徒の正しからぬ言語の影響を受けぬように始終非常なる苦辛をして居るといつたことがある。始終大文章家の作だけを讀んで居ると知らず知らずの間に良文體が手に入るといふのも此の無意識的摸倣の原理によるのである。

る。此の故に實際作文上の効果からいへば兩三年間能文家の著作を誦する方が修辭學を系統的に學ぶに比して遙かに優つて居る。然らば家庭に於けると學校に於けるとに論なく兒童に讀ませる書物をばよく吟味して天才の手に成つた最も完全な作を授けねばならぬこと特に言ふまでもないことではないか。蓋し最初に兒童に授くるものは彼れの先入を造り成すもの、即ち彼れが嗜好の方向を定むるもの、特に深き注意を要する所以である。此の半意識的要素の、知識に對する關係に就いては已に本講義の第八章に於いて「不斷感覺」(sensation continuum)と聯絡させて説明してある。又其の教育上の輕からざる役目に就いては讀者に看過されぬように幾度か言を強めて注意した。

子供を養育教訓する上に於いて同情が大切なる職分を有つて居るとは人類の祖イノッが其の初子（おひこ）に命名した時から一般に認められて居るけれども私欲の混らぬ同情は、其の起原の古い割合に一般に行はれては居ぬ。人間の社會的本能が最も深く満足を感じて感謝の情に打たるものは他人に同情を寄せられた場合即ち私欲の混らぬ愛情の對象となつた場合である。兒童は丁度草木が雨露日光に

感應するやうに自然によく他人の同情に感應する。彼れの身體的衝動でさへもそれがよく發達するには保護者の同情ある獎勵を要するではないか。知的及び道德的衝動が一層多くの同情を要すると固よりである。蓋し兒童を喜ばすものは其の心を惹くものである、而して兒童の心を惹くものが無意識の裡に其の影響を及ぼすこと疑ひを容れぬ。兒童に直接に影響を及ぼす諸の教育的勢力の中で最も大いなるものは同情である。如何なる同情か。曰はく、兒童を益せむが爲めには何物をも犠牲に供することを厭はぬ同情——兒童の性質、及び彼れを立派なる大人に發達せしむべき方案を研究して倦まざる同情——富める者に對しても貧しき者に對しても、氣に入つた者に對しても氣に入らぬ者に對しても、伶俐なる者に對しても遲鈍なる者に對しても、誠實なる者に對しても不誠實なる者に對しても、同様に寄せる同情——忍耐強く、深切で、如何なることにも挫けず、決して消滅することなき同情——斯かる同情にして始めて最大なる教育的勢力と稱せらるることが出来る。同情は忍耐の母、新方案の發明者である。其の温かい手は決して冷めることなく、其の底ひなき泉は永劫に流るゝことがない。若し兒童研究の

結果兒童に對する愛情興味の油然として湧き來たらぬ者あらば其の人は親としても教師としても兒童を研究するに適した人ではない。又、兒童研究の結果其の生涯の大部分を之れに抛たうと思ふほどに熱して來ぬ人があらば其の人の研究事業は遂に徒事に歸せざるを得ぬ。古來世に出てたる偉大なる教育家は其の男子たるも婦人たるも問はず悉く温情無私、献身の人であつた。

第二十三章 結論

兒童學は茲に一、先づ結了した。若し此の講義が首尾克く其の目的を達したものとすれば、讀者はこれから進んで兒童研究の途に上らるべき筈である。そは是れまで述べた所は兒童の性質及び兒童問題研究のホンの道案内で、是れから進んで研究すべきこと、研究して解決すべきことは前途に山なして居るからである。此の山なせる問題を研究し解決するには一方に於いて數多の兒童に就いて實地の觀察を爲すと共に他の一方に於いて斯の學に關する多くの著述を参考せねばならぬ。本講義に於いて陳述した及び本講義の少しも説き及ばさなかつた諸問題に關し、已に科學的に精密なる研究をして之れを公にした學者も多くある。讀者が今後兒童學の如何なる方面に研究を進めらるゝにせよ、其等の著述を参考すれば多大の利益を得ることが出来るであらう。尙ほ之れに就いては卷尾の簡略なる兒童學參考書目を一覽せられむことを望む。

此の講義に於いて述べた所は兒童學の研究すべき題目中の主要なる部分であ

るが、此の他にも、特に章を設けて講述する価値のあるものが澤山ある。例へば、兒童の宗教的觀念、兒童の滑稽感、天才の徵候、墮落の傾向、好奇心と驚異心、人種の關係が各種の知力に及ぼす影響、反應の時間、美術感、幻覺、夢、催眠的指示、恐怖の起原、兒童の教師としての兒童、春機發動期、懶惰の結果、男女兩性の心的差異、兒童の偏見、脊椎彎曲、其の原因及び治療法、兒童の惡戯、兒童の數の觀念、兒童の圖書、假作物語の中に現はれたる兒童、兒童に課すべき書籍、日曜午後問題、兒童の生活に適したる詩歌、音樂、御伽噺、神仙譚の職分、家庭の眞の天職——是等はいづれも兒童學の精密に研究する價值ある問題である。

兒童を研究するに唯だ書籍或るひは自分一己の觀察によるのみにては不十分なるを免れぬ。此の缺を補ふに屈竟なるは會を組織して衆多の同志と共に研究することである。先づ各地方に兒童研究會を起すが可い、之れによつて大いに此の學問及び實際教育の進歩を助けることが出来るであらう。又教師の會は各種の専門學者の協力を得ることによつて少なからざる裨益を得ることが出来る。凡べて兒童教育に従事する者は、普通の醫師、齒科醫、眼科醫、耳鼻咽喉科醫、神經科醫、

乳母、牧師、心理學者、科學者、哲學者、著述家等凡そ兒童に多少の關係興味を有する人に乞うて其の經驗を示して貰ふが可い、又其等の人も喜んで自己専門の立場から見た所を公にすべきである。見識ある母親も亦兒童研究會の貴重なる會員たるべき人である。斯様な研究會に於いては各自の觀察研究の報告を其の主要なる事業の一つとするが可い。又其の研究事項には其の前後連續の間に論理上の關係があるようにし、而して其の議論は枝葉に流れぬよう、又無益なる概括的空論に陥らぬように注意せねばならぬ。本講義に擧げた諸問題を片端から實驗して行けばそれだけでも優に斯様な會の一年間の事業にはなるであらう。斯様な會の通弊として兎角不常態の兒童の調査に時間の大部分を費やす傾きがあるが、是れは賢い仕方ではない。兒童研究者の立場からいへば、其の研究の中心となるものはあくまでも常態の兒童でなければならず、又常態の兒童はあらゆる非常態の兒童が之れを模範とし標準として其の歩調を合はせ行くべきものであることを記憶しなくてはならぬ。又兒童を觀察し試験する方法に關して常に注意すべきことは、之れによつて兒童の自然性を害ふことの無いように、時機が來ぬ中に漫りに

兒童の自意識を覺醒することの無いように、又注意を與へられると却つて脱し難くなるような些細な缺點を擧げ示すことの無いやうにすべきことである。凡べて兒童を観察試験する際には熟練なる醫師の行ふ方法に従ふが可い。

或る地方には全く母親だけから成り立った「母親會」といふものがある。婦人が斯様な問額に深き趣味を感じずるに至つたのは取りも直さず、吾等の家庭も學校も將來此の殊勝なる運動から多くの裨益を得べきことを豫示して居るのである。蓋し兒童の教育の理想境は見識ある教師と母親との真正の協力によつて始めて實現さるべきものである。

兒童は頑是ない弱い憫れなる者で、譬へば何の變化も面白味も無い植物の種子の様なものである。さりながら草木の種子がやがて開展して目もあやなる美花芳草となり、龍の幹、蛟の枝、空をよほふ緑の大蓋を現ずる様に、搖籃に眠つて居る無我無心の人形も漸々發達して種々の特色ある大人物となる。此處が吾等の深く注意すべき所、哲學者が芥子裡に須彌山を見るやうに、教育者は搖籃の裡に聖人君子

英雄豪傑を見出ださねばならぬ。而して人形同様の嬰兒が漸次に發達して偉大なる人物になる其の道筋及び彼れをして無事に前の段階より後の段階に發展し行かしむべき方法を研究するのが即ち兒童學の職分、而して實際其の方法によりて滞りなく其の道筋を辿り行かしめるが教育者即ち父母教師の天職である。育英の業に従事する者は此の理を思つて深く自省自重しなくてはならぬ。

無價の珍寶

ヒルダとデ・セヒンとは幼い時のように何時までも親しくして居ったが、妙齡に達してから、ヒルダは貧しいけれども正直な大工に嫁ぎ、デ・セヒンは名高い大財産家の夫人となつた。其の財産家はデ・セヒンを迎へてから彼の女の爲めに宮殿の様な立派な住居を建て、それから彼の女を携へて歐州に行き、名ある都府を悉く見物させて新家屋を飾るべき珍らしい寶物をば思ふまゝに買ひ求めさせた。さて其等の寶物が悉く到着してそれぞれ然るべく備へ付けられてから、デ・セヒンは使してヒルダを迎へ家の内を残る所なく案内した。然るに、デ・セヒンが敷物の風雅な模様、幔幕の美はしい襪、家具の精緻なる彫刻、或るひは名工の手に成つた油繪彫像などの意義由來を説明すると、其の度毎にヒルダは微笑して、如何にも美しくいけれども、世の中にはそれよりも尙ほ美しくしいものがありますよといふ。デ・セヒンはいたく失望して問うた、ヒルダさん、これよりも美しくしいってドンナものがありませんか。ヒルダは幼かつた昔の様に其の腕をデ・セヒンの腕にかけ、サア一

緒にわたしの家へ來らっしゃいというて出掛けた。二人はやがてヒルダの粗末な家に着いた。粗末とはいへ、質樸でさつぱりして、綺麗な白壁や雨戸がよく家人のたしなみを示して居る。内に入ると硝子戸には處々に小さい指の痕がある。室に入ると搖籃の裡なる嬰兒が紅の頬に微笑を湛へて二人を迎へた。其の時ヒルダは振り返つて、デ・セヒンさん、善美を盡くした御屋敷にも、硝子戸の其の指の痕と可愛い赤見の片言ほど美はしいものはありますまい。デ・セヒンの目には涙が一ぱいである。感に堪へてや直ちに其の友を抱き寄せて、ヒルダさん、眞實にあなたの仰しやる通りです！ (After Eugene Field)

附録 兒童學參考書目

斯の學に關係ある著述の名を詳しく擧ぐればそれだけでも一小冊子を成すであらう。次ぎなるは其の中の主要なるもののみを掲げたのであるが、一般の讀者並びに斯の學を専攻する學者に取つていづれも少なからぬ價值あるものである。順序は書名のアルファベットの順によつた。

- ▲カル、ラング氏著『攝覺』(“Apperception.” Karl Lange.)
- ▲ヘンリ、モーツリ氏著『體と心』(“Body and Mind.” Henry Maudsley.)
- ▲ドンナルドソン氏著『腦の發育』(“The Growth of the Brain.” H. D. Donaldson.)
- ▲エッドガー氏著『偉人の幼時』(“Boyhood of Great Men.” J. G. Edgar.)
- ▲ウッド氏著『腦の働き及び過働』(“Brain Work and Overwork.” H. C. Wood.)
- ▲チェームス、サリ氏著『兒童の仕振』(“Children's Ways.” James Sully.)
- ▲アレキサンダー、エフ、チャムパーレーン氏著『一般世俗の思想に於ける兒童及び兒童時代』(“The Child and Childhood in Folk Thought.” Alexander F. Chamberlain.)

- ▲チャコブ、エー、リース氏著『貧者の兒童』(“Children of the Poor.” Jacob A. Riis.)
- ▲デュームス、サリ氏著『兒童期の研究』(“Studies of Childhood.” James Sully.)
- ▲ヘンリ、ケー、リトイス氏著『兒童其の精神上の性質』(“The Child, it's Spiritual Nature.” Henry K. Lewis.)
- ▲ケート、デー、キギン氏著『兒童の權利』(“Children's Rights.” Kate D. Wiggin.)
- ▲ムルナル、ペレー氏著『兒童期の最初の三年』(“First Three Years of Childhood.” Bernard Perez.)
- ▲フランシス、ブリアナー氏著『兒童の研究』(“The Study of Children.” Francis Warner.)
- ▲チャールス、アール、ヘンダーソン氏著『依他的、不具的及び過失的品類』(“Dependent, Defective, and Delinquent Classes.” Charles R. Henderson.)
- ▲ルーメン、ペー、ホルヴェク氏著『中央神経系統の教育』(“The Education of the Central Nervous System.” Reuben P. Halleck.)
- ▲チャールス、エッチ、バーネット氏著『視覺、並びに視覺に就きて如何に注意すべきか』(“The Eyesight and How to Care for it.” Charles H. Burnett.)

- ▲チャールス、エフ、スキング氏著『家族に關する歴史的及び社會的研究』(“The Family, an Historical and Social Study.” Charles F. Twining.)
- ▲ルキイド、モールガン氏著『習慣と本能』(“Habit and Instinct.” Lloyd Morgan.)
- ▲バーネット氏著『聽覺及び如何に之れを保護して其の發育を全うすべきか』(“Hearing and How to Keep it.” Charles H. Burnett.)
- ▲トマス、リボー氏著『遺傳』(“Hereditry.” Th. Ribot.)
- ▲フランシス、ガルトン氏著『遺傳的天才』(“Hereditary Genius.” Francis Galton.)
- ▲ヘルマン、コーン氏著『學校に於ける眼科健全學』(“The Hygiene of the Eye in School.” Hermann Cohn.)
- ▲コムペーレ氏著『兒童の知力的及び道德的發達』(“The Intellectual and Moral Development of the Child.” G. Compayré.)
- ▲ダングダル氏著『チーク族』(“The Jukes.” R. L. Dugdale.)
- ▲モリソン氏著『年少犯罪者』(“Juvenile Offenders.” W. D. Morrison.)

- ▲ラングドン、ダウン氏著『幼年期及び青年期に於ける心的疾病』(“Mental Affections in Childhood and Youth.” Langdon Down.)
- ▲シャトルワルス氏著『心の不具なる兒童』(“Mentally Deficient Children.” G. E. Shuttleworth.)
- ▲フレンチャー、ビーチ氏著『精神薄弱の兒童』(“Mentally Feeble-minded Children.” Fletcher Beach.)
- ▲ブライエヘル氏著『兒童の心的發達』(“Mental Development of the Child.” W. Preyer.)
- ▲フョルクス、アッドラー氏著『兒童の德育』(“The Moral Instruction of Children.” Felix Adler.)
- ▲カザリン、エーケン氏著『心習練の諸方式』(“Methods of Mind Training.” Catharine Aiken.)
- ▲ジョン、ジーマケンドリク氏及びキャリアム、スノイドグラス氏著『感官の生理學』(“The Physiology of Senses.” John G. Mc Kendrick and William Snodgrass.)
- ▲クローン氏著『心理學に於ける實際的過程』(“Practical Lessons in Psychology.” W.

O. Krohn.)

- ▲ルーベン、ヒー、ハントク氏著『心理學と心的修養』(“Psychology and Psychic Culture.” Reuben P. Halleck.)
- ▲ジョン、デューイ氏著『心理學』(“Psychology.” John Dewey.)
- ▲モーヅリ氏著『心的疾病に於ける責任』(“Responsibility in Mental Disease.” Henry Mandstey.)
- ▲ルイ、ワルドシュタイン氏著『半意識の自我』(“The Subconscious Self.” Louis Waldstein.)
- ▲スーザン、イー、ブロー氏著『記號教育』(“Symbolic Education.” Susan E. Blow.)
- ▲ブライエヘル氏著『兒童の心』『感官と意志』『知力の發達』(“The Mind of the Child.” “The Senses and the Will.” “Development of the Intellect.” W. Preyer.)
- ▲アール、バーンズ氏著『教育上の研究』(“Studies in Education.” Earl Barnes.)
- ▲ヘンリ夫人著『家庭及び兒童の生活に關する研究』(“Studies in Home and Child Life.” Mrs. S. M. I. Henry.)

62
398

兒童學 終

右に擧げた外、諸邦國の兒童研究會、心理學會等の機關雜誌、或るひは専門家の發行する定期刊行の書籍などにも有益にして價值あり趣味のあるものが少なからずあるけれども、今は省略して、茲には唯だ纏まつた書として發行されたものの中の主要なるもののみを掲げた。

共、三三三、
9/18

終

